

# 嶋上遺跡群 19

上  
郡

1 9 9 5

高槻市教育委員会

# 嶋上遺跡群 19



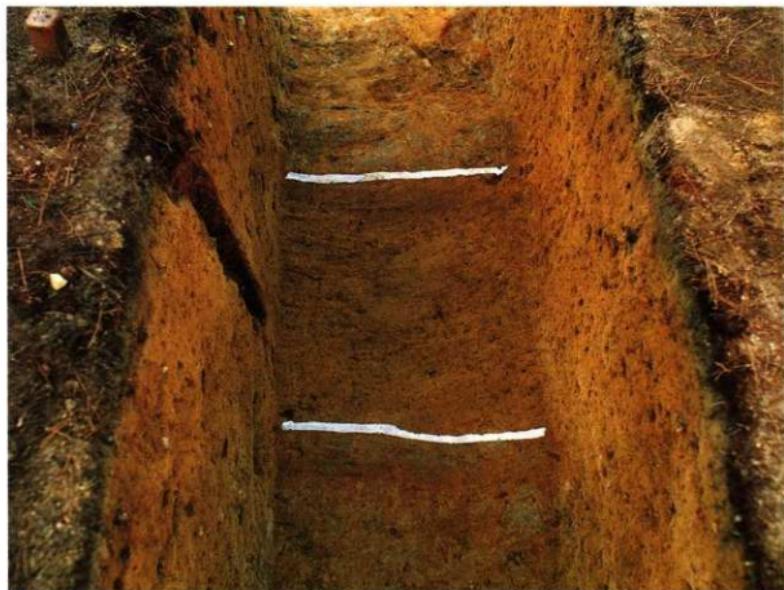
1. 郡家車塚古墳 全景（東側から）



2. 郡家車塚古墳 トレンチ13全景（北側から）



3. 郡家車塚古墳 トレンチ13 墓道北端・被覆粘土（東側から）



4. 郡家車塚古墳 トレンチ13 第2主体部南側（東側から）



5. 郡家車塚古墳 トレンチ14全景（東側から）



6. 郡家車塚古墳 トレンチ15全景（北側から）



7. 郡家車塚古墳 トレンチ14 墓頂部埴輪列（北側から）



8. 郡家車塚古墳 トレンチ15 墓頂部埴輪列（北側から）



9. 郡家車塚古墳 トレンチ17全景（東側から）



10. 郡家車塚古墳 トレンチ17 A区埴輪列（北側から）



11. 郡家車塚古墳 トレンチ17 B区埴輪列（東側から）



12. 郡家車塚古墳 トレンチ17 C区埴輪列（南側から）



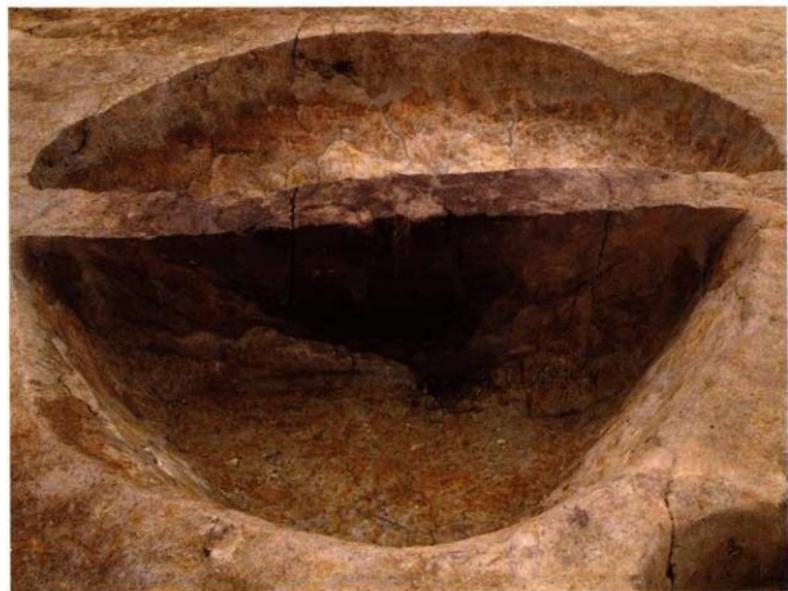
13. 嶋上郡衙跡（42-A地区） 挂塚3号墳全景（南西側から）



14. 嶋上郡衙跡（42-A地区） 挂塚3号墳周溝（北東側から）



15. 島上郡衙跡 11-C・D・G・H・K・L地区 調査区東半部（北側から）



16. 島上郡衙跡 11-C・D・G・H・K・L地区 土壙窯134埋土の状況（南側から）

## は し が き

1月17日未明に西日本一円を襲った地震は、阪神・淡路地区に甚大な被害を及ぼしました。本市でも少なからず被害がみられました。当センターでは土器の落下による破損や書架の転倒など若干の影響があったものの、文化財関係にはさわい大きな被害はありませんでした。このたびの震災で被害にあわれた方々に謹んでお見舞い申し上げるとともに、今回の地震はこうした自然災害から文化財をいかに守り、保護していくかという切実な課題を改めて提起させたといえます。

さて、今年度も島上郡衙跡をはじめとする市内遺跡の発掘調査を実施してまいりました。このうち昨年に引き続き実施された郡家車塚古墳と芥川山城跡の調査では、更なる貴重な成果を得ました。郡家車塚古墳では粘土梆を主体部とする埋葬施設のあり方が明らかになり、4世紀末の前方後円墳に新たな資料を提供することとなりました。また芥川山城跡では、弘治2年の火災が広範囲にわたったことや、城の廃絶時期が従来説かれていたよりも新しいことがわかり、中世の城郭研究において見過ごせない重要な知見が得られました。

一方、郡衙西辺部の調査では、これまで知られていなかった掛塚古墳群や土壙墓群を発見し、この一帯は弥生時代から連續と墓地が営まれていたことが判明いたしました。

ここに今年度の調査成果をまとめましたが、いずれも本市の歴史を豊かに物語る貴重な資料であり、三島地域史の研究に供したいと考えております。

本書を作成するにあたり、多くの方々にご教示を仰ぐとともに、ご協力をいただきました。末筆ながら記して感謝いたします。

平成7年3月31日

高槻市教育委員会

高槻市立埋蔵文化財調査センター所長 富成哲也

## 例　　言

1. 本書は、高槻市教育委員会が平成6年度国庫補助事業（総額18,000,000円）として計画、実施した高槻市所在の史跡・島上郡衙跡附寺跡周辺部及び市内遺跡の発掘調査事業の概要報告書である。
2. 事業は、高槻市教育委員会の直営事業として実施し、大阪府教育委員会の助力を得て、平成6年4月20日に着手、平成7年3月31日に終了した。
3. 調査は高槻市立埋蔵文化財調査センターがおこなった。本書の執筆・図面作成・製図は橋本久和、宮崎康雄、高橋公一、木曾広、中村剛彰がおこない、分担は文末に記した。出土遺物の写真撮影は清水良真が担当した。遺物整理については以下の各氏から援助をうけた。厚く感謝する。

白銀良子・新山知香恵・佐藤喜久子・小川隆久・内山千栄子
4. 調査の実施にあたり、以下に掲げる土地所有者の方々をはじめ、関係機関各位のご協力をいただいた。ここに記して感謝いたします。

中村義一・尾下千明・尾下加代子・松本知治・吉田久斗・吉田規代子・藪内順治・辻政則・遠矢淳一・児玉省三・川井秋男・伊藤敏雄・仲谷攻・幸山友茂・水野龍三・川上貢  
(順不同、敬称略)

## 目 次

I 郡家車塚古墳 .....	1
II 岐上郡衙跡 .....	32
III 郡家今城遺跡 .....	60
IV 高櫛城跡 .....	66
V 天川遺跡 .....	67
VI 芥川山城跡 .....	69
VII ま と め .....	74

No	遺跡名(地区)	調査地	面積(m <sup>2</sup> )	申請者
1	郡家車塚古墳	岡本町34-2	859.0	中村義一
2	岐上郡衙跡(18-G)	清福寺町820-1	44.84	尾下千明・加代子
3	" (42-A)	郡家新町494-3	328.0	松本知治
4	" (49-B)	川西町一丁目926-7	62.92	吉田久斗・現代子
5	" (67-F)	川西町一丁目1088-8	68.25	森内順治
6	" (67-J)	川西町一丁目1088-11	66.91	辻政則
7	" (74-K)	郡家新町156-35	53.50	遠矢淳一
8	" (75-K)	郡家新町163-47	55.17	児玉省三
9	" (75-M)	郡家新町163-13	92.66	川井秋男
10	" (11-C+D+G+H+K+L)	郡家本町544-1	1,500.00	高瀬市長
11	郡家今城遺跡	氷室町一丁目777-2-3	199.77	伊藤敏雄
12	高櫛城跡	出丸町964-28	73.67	仲谷攻
13	天川遺跡(94-1)	須賀町282-5	231.41	幸山茂友
14	" (94-2)	須賀町282-6	198.35	水野龍二
15	芥川山城跡	大字原4030	238.0	川上貢

平成6年度 市内遺跡発掘調査一覧



## I 郡家車塚古墳

### 1. 郡家車塚古墳の調査

郡家車塚古墳は高槻市岡本町34番地2に所し、小字名は池ノ谷、畦垣内と称する。古墳は全長約86mの西向きの前方後円墳で、南平台丘陵の南麓裾に位置し、ちょうど今城塚古墳の北方約200mのところに位置している。現状は山林である。

郡家車塚古墳は、弁天山A1号墳にはじまる一連の首長墓群の系譜上にあり、そのなかでも弁天山C1号墳に後出し、前塚古墳に先立つものとして位置づけられている。

なお当古墳は平成4・5年度の調査で、葺石、埴輪列を検出するなど、古墳築成時の姿が徐々に判明しつつある。今回は前年度までの調査で確認できなかった点を含め、古墳の全容を把握するためトレンチ調査を実施した。

トレンチは後円部と前方部をあわせて7ヶ所設定した。また各トレンチ番号は昨年度調査のトレンチ1~12に統くものとして、トレンチ13~19を設定した。

遺構（図版第2~15、図2~14、付図）

トレンチ13（図2~4）

トレンチ13は後円部墳頂に設けた南北13.5m、東西8mの調査坑で、その後、北、南、東側に拡張した。遺構としては表土から0.6m前後の深さで墓壙の掘形、1.4m前後の深さで棺を被覆したとみられる粘土のひろがりが検出された。さらに北および南拡張部分では被覆粘土の小口部とおもわれる粘土塊の高まりを検出し、その下端には排水施設とみられる礫群が認められた。こうした粘土の広がりに対して、板石などの堅穴式石室の用材がみられないことから、埋葬施設は粘土廓と推定される。また東拡張部分でも、表土から1mの深さでさらに1基の墓壙を確認した（第2主体）。このためさらに3m北側の地点に幅約1m、長さ約2mの調査坑を設けて第2主体の確認につとめたところ、表土より約0.8m下に墓壙の続きが確認された。

〔第1主体〕 墓壙は南北10.7m、東西3mを測り、主軸はN-3°-Eである。

墓壙は黄褐色砂質土、灰白色粘質土、暗灰色砂質土などを突き固めて構築した墳頂部を60°~70°前後の角度で掘り込んでいる。

墓壙肩部の標高は西側で39.21m、東側で38.98m、北側で38.9m、南側で39.2mであり、ほ



図1. 郡家車塚古墳調査位置図

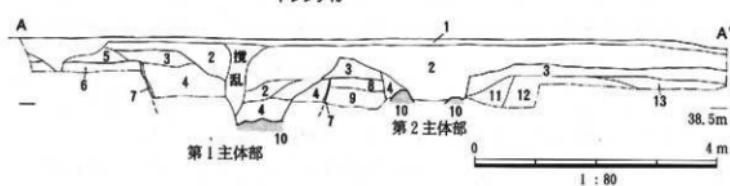
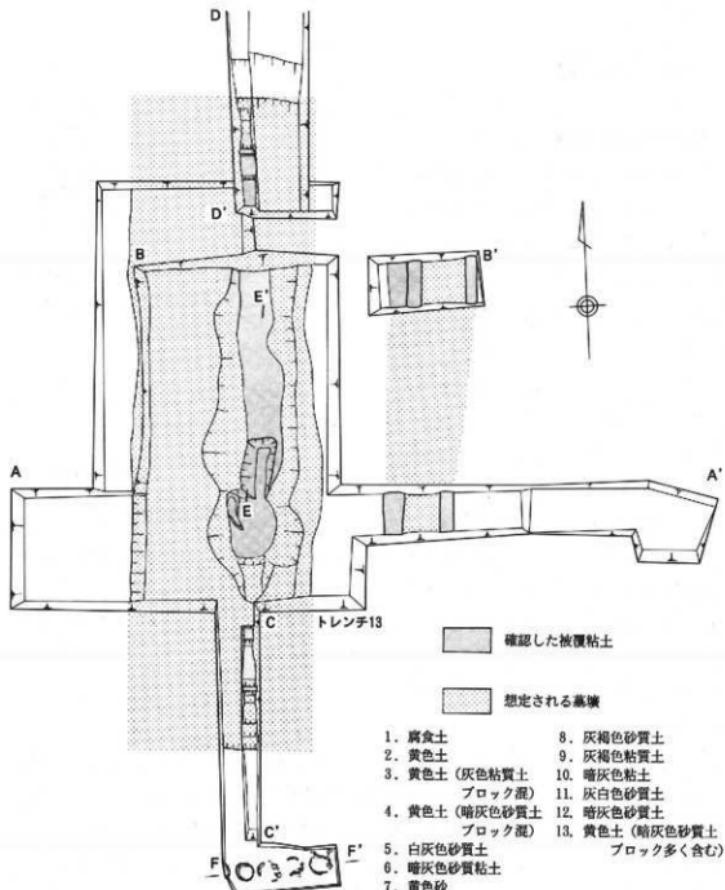


図2. トレンチ13・16平面図およびトレンチ13断面図

ば39.0m前後で検出される。墓壙底については確認していない。

墓壙掘形が検出されるまでの基本的な層序は上から腐食土（0.1m）、黄色土（0.4～0.5m）、灰白色粘質土ブロックが混じる淡黄灰色土（0.3～0.4m）である。

このうち黄色土と淡黄灰色土の境は不明瞭である。また墓壙内封土の土質は灰白色砂質粘土、黄褐色砂質土、灰黄色土、褐黄色砂質粘土、暗灰色砂質土（0.5m以上）の互層であり、その下に暗灰色粘土〔棺被覆粘土〕が認められる。

墓壙封土については各土が單一ないしはブロック状に層を成しているが、木棺腐食後に陥没しているとみられ、中軸線に沿って窪んでいる様子が看取された。

なお、トレンチの南半分では1.2m四方の範囲で黄色土と墳丘構築土が攝り鉢状に落ち込んだ、土質の非常に柔らかいところが認められた。落ち込みの内からは須恵器の小片が1点出土した他には、盗掘の可能性を示すような遺物はみられず、また坑底は棺被覆粘土層の上面で終わっている。これをもって盗掘坑と断定することはできないが、ただ部分的に落ち込んだ箇所が認められ、さらに須恵器片が内部から出土していることからしても、人為的に掘り込まれた可能性も考えられる。

棺被覆粘土の小口部は南北の両地点とも墓壙肩から0.5～1mほど下がった、標高38.0m前後のところで検出した。色調は暗灰色の緻密な粘土である。全長約8.8mで、検出高は北端で38.55m、南端で38.1mを測り、北に向かって高くなっている。粘土の小口部は南北とも下端より60度前後の傾斜で立ち上がり、上端が高く隆起している。さらに、内側へ0.2m前後の地点で一旦低くなった後、0.5m程度水平面を形成し、再びわずかに隆起している。

南北の小口部分下端で検出した礫石の検出高は北端で38.2m、南端で37.85mを測る。検出したこれらの礫石は、ほぼ拳大の河原石を用いており、排水施設として周囲に敷き詰められているのであろう。なお木棺の全長については未確認のため、不明である。

〔第2主体〕 東側の拡張区で表土から約1mの深さで検出した。

墓壙掘り込みは墳丘構築土の淡黄灰色土を東西2.5mの幅で0.2～0.3m程浅く掘り下げた後、1.5mの幅を70度前後の角度で掘り込んでいる。

第2主体の埋葬施設では墓壙の掘込み面より0.5m前後掘り下げたところで、幅約1.3mの墓壙両端に沿って暗灰色の緻密な粘土を検出した。第2主体の粘土の検出高は南側で39.7～39.8m、北側で38.8mを測る。墓壙掘込み内の土層は単一土層で、墳丘の最上層である黄色土と同質である。

ただし墓壙の掘込みは、墳頂部からは掘り込まれていないことから、後円部墳頂面を覆う黄色土については、第2主体構築時に伴う墳丘盛土と考えることができる。

以上のことから第2主体の埋葬施設が、第1主体構築時の墳丘を掘り込んでいることにより、

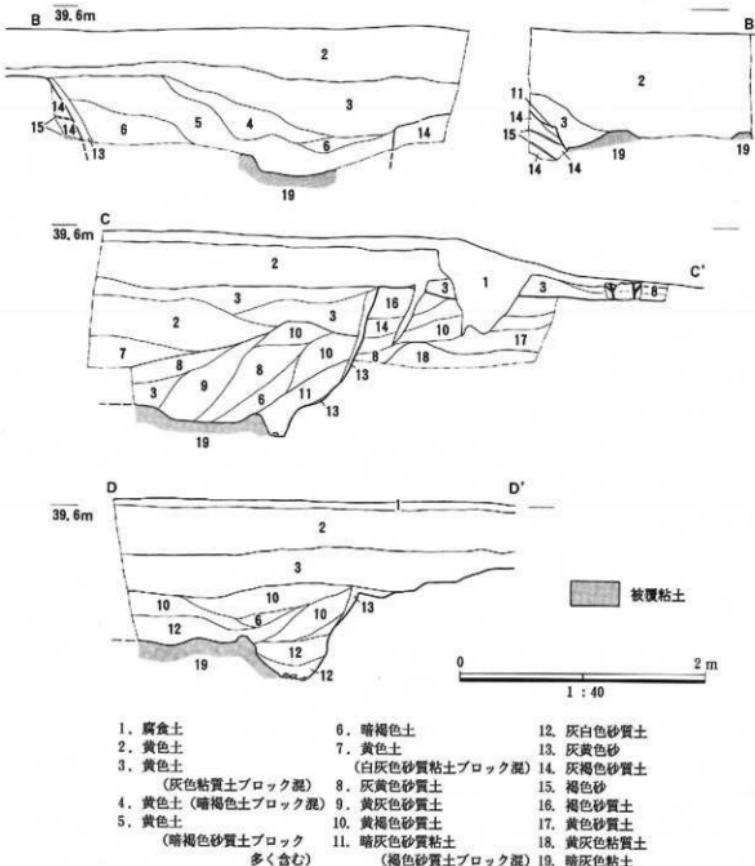


図3. トレンチ13断面図

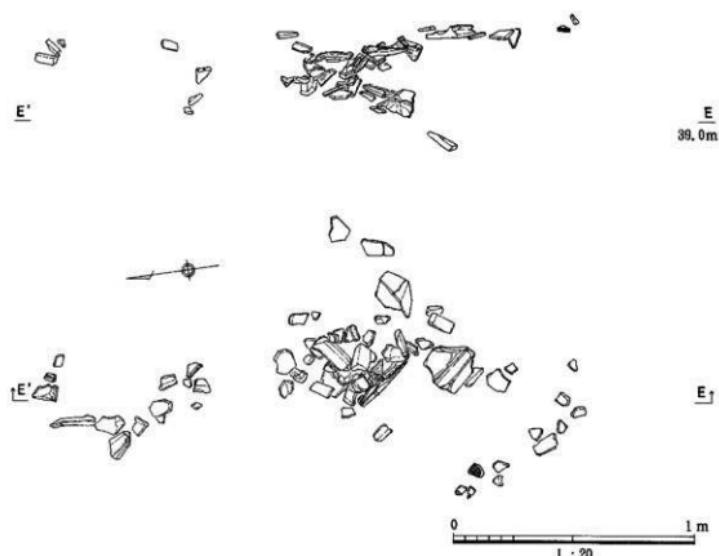


図4. トレンチ13出土埴輪平面図・断面見通図

第1主体と第2主体とは埋葬時期に開きがある可能性を指摘できよう。

遺物としては埴輪・土師器・須恵器などがある。埴輪は検出した部材から入母屋・高床の形態をとる家形埴輪であることがわかった。出土地点は第1主体上層の、黄色土～淡黄灰色土中に落ち込んだ状況で出土した。検出したレベルは39.50～38.54mにわたり、最も上位の出土地高は表土直下、最も下位のものが棺被覆粘土の直上付近にまで至っている。そのうち密集して検出した箇所が図4であり、標高は39.0～39.4mである。

土師器はトレンチの東拡張区で検出した。器種としては無頸壺、器台などがある。

その他にも埴輪の部材とも思われる土製品などが認められた。これらの遺物は比較的まとまって出土しており、出土地点としては第2主体より約2.5m東の淡黄灰色土中である。検出した標高は39.1m前後である。

須恵器は第1主体南側の落ち込み中より検出した。無頸壺と思われるが小片であり、断定はできない。時期は不明である。検出した標高は約38.4mである。

#### トレンチ14(図5・6)

トレンチ14は後円部東斜面に設けたもので、長さ15.7m、幅1.2mを測る。埴頂部及びテ

ラス部からは埴輪列を、墳丘斜面の上段と下段で葺石をそれぞれ確認した。

〔墳丘上段〕 蓐石の岩種に関してはチャート、砂岩質などが多く、基本的には昨年の報告と大きく変わることろはない。

層序は上から腐食土（0.2m）、灰黄色土（0.1～0.2m）、黄色土（0.5m）黄灰色土（0.24m）、黄褐色土（0.1～0.38m）、濃黃褐色土（0.1m）となり、トレンチの東側、テラス部のやや上方から、濃黃褐色土の上層に黄褐色土が堆積している。

墳頂部の標高は39.0m、上段裾部は34.56mで比高差は4.44mを測る。上段葺石は基底石付近はよく残っているが、上方にかけては大半が流失している。

基底石・区画石には扁平・直方体の20～30cmのものを、その間に充填する石には直方体にちかいものが多く、大きさは10～20cmのものを用いている。

葺き方は、遺存部分を見る限りでは密で丁寧である。横方向の基底石列の上に同様な大きさの石を平積みした後、基底石列に直交するかたちで上方へ大きめの石を区画石として小口積みしているのが観察される。なおこの縦区画石列は現状では基底石列から1.0m（標高35.6m、水平距離約1.6m）前後の高さまで確認できるが、それより上方は流失しているためわからない。

充填石については縦区画石列の北（右）側について明確な充填単位が認められる。まず基底石列より右上方45°の角度で0.7m（標高34.6m、水平距離約1.2m）の高さまで斜行させて充填した後、縦区画石列に平行に葺いている。斜行させている箇所では中途にやや大きめの石を用いているのが認められる。また縦区画石列の南（左）側については遺存部分から見る限りでは、基底石列に対して直交するかたちで葺いているのが認められる。ただし基底石から一気に葺き上げるのではなく、0.45m（標高34.95m、水平距離約0.6m）及び0.82m（標高35.8m、水平距離約1.3m）の高さで大きめの石を配置しており、これが横方向の区画石列となる可能性がある。

断面図はトレンチ東側の壁面上土層図に遺存状態の良好な葺石のところの図面をあわせたものである。葺石は積み上げる際に上の石が下の石に半分以上重なり合っており、基底石付近においては上方の石を小口部分までかぶせるように葺いている。また個々の石は30～45°の傾斜をもっており、墳丘に突き刺したような状況で検出したものも多い。

葺石の傾斜角は、測点によりひらきがあるが、基底石から1.42m（標高36.0m、水平距離約2.37m）の高さまでがほぼ30°前後、それより上方はほぼ20°前後であり、傾斜の変換点がみとめられる。

〔テラス部〕 平坦面は幅約3.5mで下段へ向かって5～10°傾斜している。上段裾部より2m外側で埴輪列を検出している。

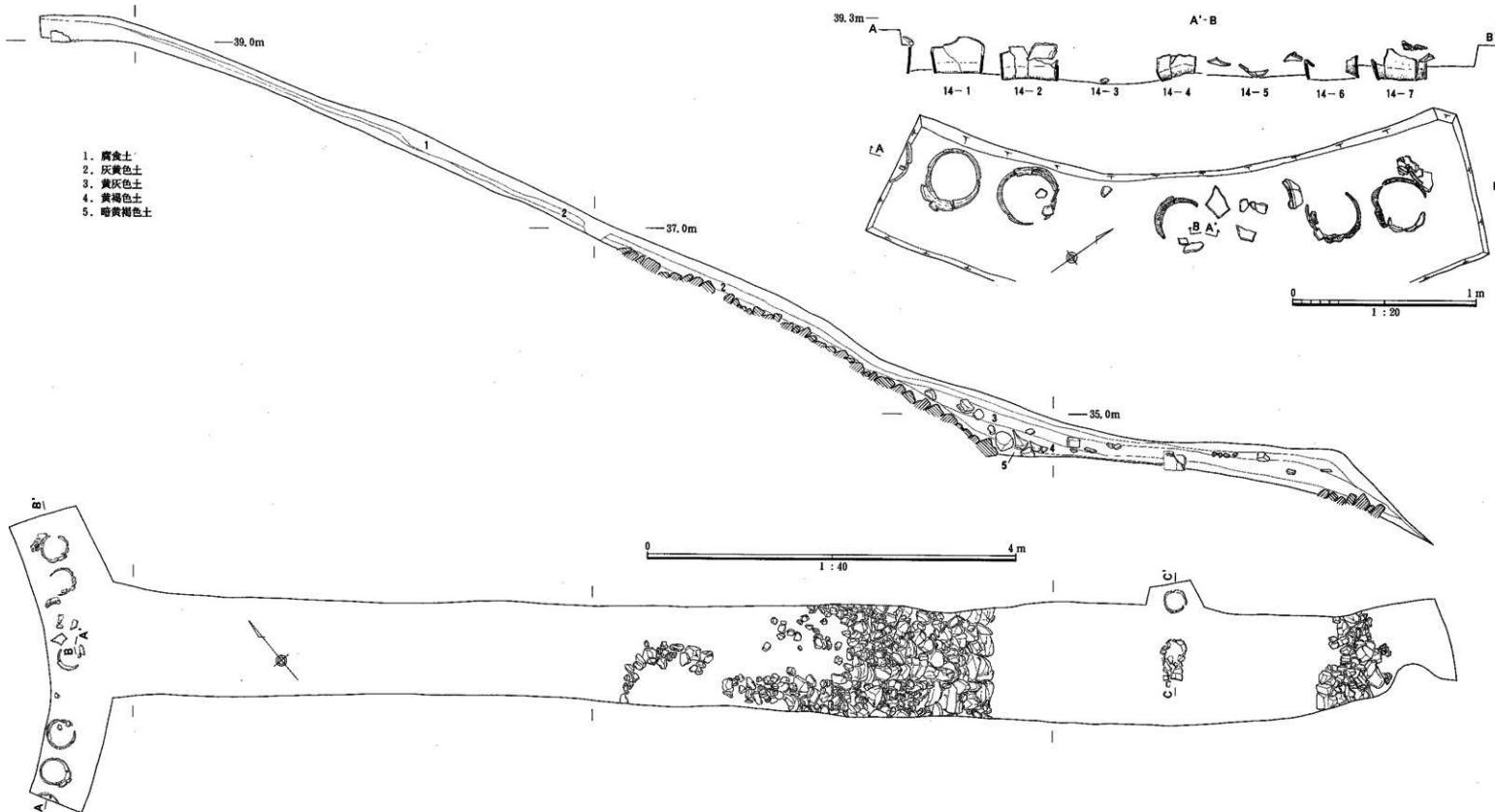


図5. トレンチ14断面図・平面図および墳頂部埴輪列平面図・断面見送図

(埴丘下段) 下段最上段に葺かれていた天端石の一部と思われる石列を検出した。下方の葺石はほとんど流失している。石の大きさは、天端石は上段の区画石列と、充填石は上段のそれとほぼ同じである。

葺き方については基本的に上段と大差なく、充填石は天端石に対して直交に葺かれている。施工単位については不明である。天端石の検出高は34.2m前後を測り、埴丘下段の傾斜角は20~25°前後である。

埴輪列は上段で8本、テラス部で2本検出した。いずれも基部のみの検出である。後円部頂で検出した埴輪列(14-1~14-7)は

墳頂部をとりまくように配され、中心間の距離は0.4mを測る。掘形の痕跡は明確に認められなかった。

なお確認された上段の埴輪列のうち、埴輪14-3・14-6は小片であり、立った状態では検出していない。また埴輪14-1の西側の埴輪は確認したのみで、取り上げなかった。埴輪自体の底部径は25cm前後、設置面は、おおむね39mである。

上段葺石裾部から2m外方で検出した埴輪列(14-8・14-9)は下段テラスをとりまくように配され、中心間の距離は0.5mを測る。埴輪の設置方法は、昨年度調査により、配列の際に樹立するため個別に坑を掘り込んで設置していることがわかっているが、当該部分では明確にはわからなかった。埴輪の底部径は24cm前後、設置面は、おおむね34.4mである。

#### トレンチ15(図7)

トレンチ15は後円部埴丘北側、トレンチ13の北延長線上に設けたもので、長さ13.13m、幅1.1mを測る。埴丘斜面上段の葺石、後円部頂で埴輪列などを確認した。

(埴丘上段) 墳頂部の標高は39.28m、上段裾部は35.54mで比高差は3.74mを測る。

基本的な層序は腐食土(0.2m)、盛土(1.6m)、黄色土(0.2m)、黄褐色土(0.2~0.4m)【流入土】となり、葺石検出面は灰褐色粘質土である。なお腐食土直下にみられる1.6mもの盛土は、古墳の北側にあった用水池を造る際に盛られたものとみられる。しかし盛土中から遺物が検出されず、土の盛られた時期などは不明である。

葺石は遺存状態が良好であり、全長の約3分の2ちかくが遺存している。葺石の傾斜角は基底石から埴丘の中心部方向へ水平距離にして約3mの地点で傾斜変換点が認められる。傾斜角

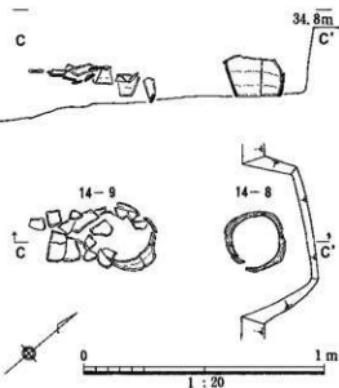


図6. トレンチ14テラス部埴輪列平面図・断面見透図

は測点によりひらきがあるが、基底石から1.36m（標高36.9m、水平距離約3.0m）の高さまでがほぼ26°前後、それより上方はほぼ20~24°である。岩種は昨年度の報告とほぼ同様である。

基底石・区画石には直方体にちかい一辺10~30cmのものを用いており、また墳丘斜面に充填する石は直方体にちかく、一辺10~20cmのものを多用している。石の葺きかたは小口積みにしており、密で丁寧である。基底石は墳丘上段裾に横方向に設置した後、同様な大きさの石を上に平積みしている。区画は基底石から0.5m（標高36.05m、水平距離約1.2m）の高さで大きめの石を配した横方向の石列の一部が認められるほか、この区画の下方にも大きめの石による縦位の区画が認められる。また葺石の施工区画としては、横方向の区画の上方では大きめの石による横方向・縦方向の区画石列は明確には認められないことから、大きく上位・下位の2区画に分けることができよう。なお上位の葺石については、明確な区画石列は認められないものの、葺かれている方向性・角度により、おおまかな充填単位が読みとれ、およそ6小単位認められた。図7に示した単位はこの上位葺石の小単位によるものである。

下位区画の充填方法は、基底石に対して左上がりに70~75°の角度で一様に斜行しているのが看取される。上位区画では小単位1、3、4、6が基底石に対して直交して葺かれているのに対し、小単位2が基底石に対し右上がりに60~70°の角度で葺かれている。また小単位5では西半分が流出しているものの、放射状に葺かれているのが看取される。これらの小単位の間には区画とまでは呼べないまでも、10cm前後の石を使用した横方向への目通りが認められる。これらは石の充填方向を変える際に、あらたに葺かれれる石の裾部になるのであろう。

〔テラス部〕 平坦面は北端部分が調査範囲外へ伸びているため、長さ、埴輪列などは確認できなかった。下段（北側）方向に向かって10°前後傾斜している。トレンチ14の調査結果から勘案すれば、幅は約3mと考えられる。

埴輪列は墳頂部で4本検出している（埴輪15-1~15-4）。いずれもタガ1段目、ないしは基部のみの検出である。トレンチ14の墳頂部埴輪列と同様墳頂部をとりまくように配され、中心間の距離は0.4mを測る。掘形については、墳丘構成土である淡黄灰色土を幅0.4~0.5m、深さ0.1m前後の溝状に掘り込んでいる。埴輪の底部径は30cm前後、設置面の標高はおおむね39.2mである。なお埴輪列から北側へ2mの地点で検出した埴輪溜まりからは壺形埴輪片が出土している。

#### トレンチ16（図8）

トレンチ16はトレンチ13の南延長線上、昨年度に調査したトレンチ4の北延長線上の後円部墳頂部に設けたもので、幅0.65m、長さ1.9mを測る。埴輪は5本検出しているが、いずれも基底部のみである。中心間の距離は0.4mを測る。掘形の痕跡については明確には認めら

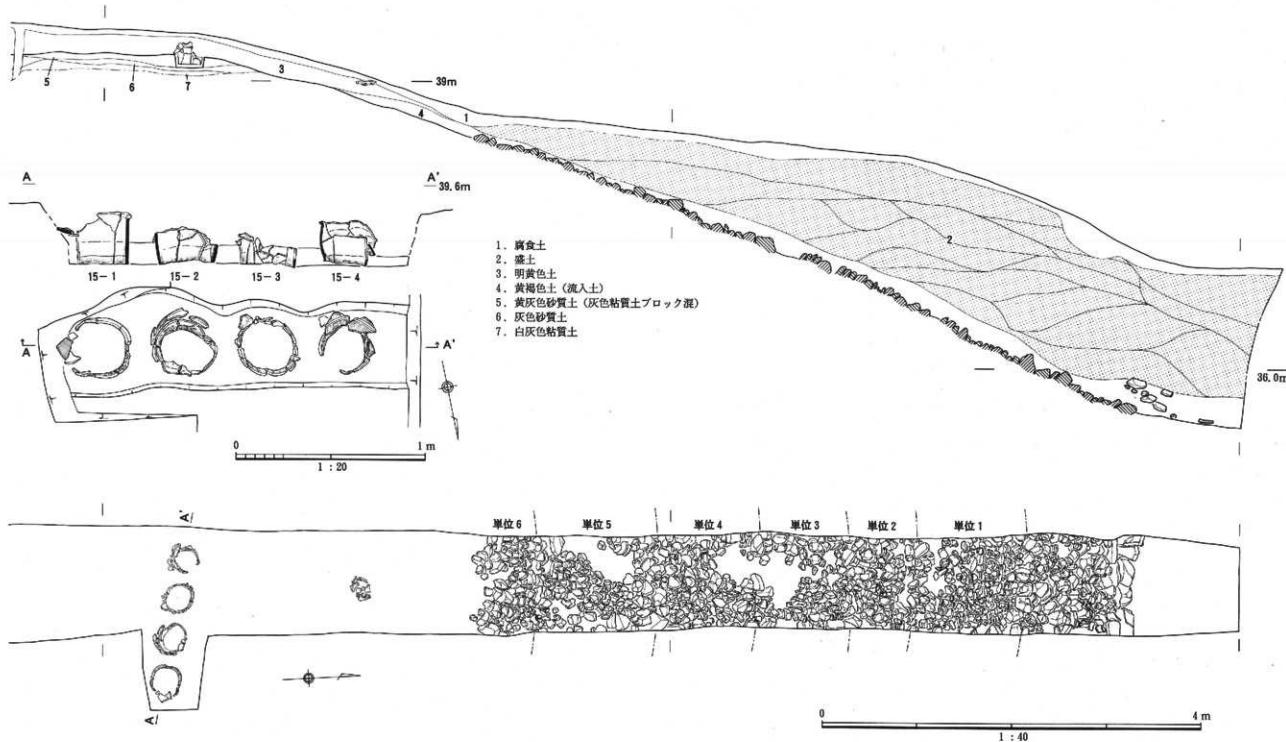


図7. トレンチ15平面図・断面図及び埴頂部埴輪列平面図・断面見透図

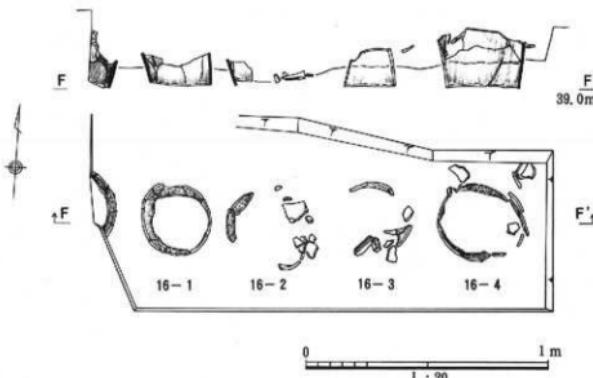


図8. トレンチ16埴輪列平面図・断面見通図

れなかった。なお検出した埴輪列のうち、埴輪16-1の西側の埴輪は確認したのみで取り上げなかった。埴輪自体の底部径は25~30cm、設置面はおおむね39mである。

#### トレンチ17(図9~12)

トレンチ17は後円部前面、前方部へいたる斜面地に設けたものであり、A・B・C区に分けて調査した。A・B区からは埴輪列と葺石、C区からは埴輪列をそれぞれ検出した。以下、各区に分けて記述する。

**[A区]** A区は後円部前面にし字状に設けたものであり、東西7.8m、南北3.2m、幅3.4mを測る。南側でみられる葺石の一部は昨年度調査のトレンチ5の北端部を含んでいる。

基本的な層序は、腐食土(0.1~0.5m)、黄色土(0.25m)[流入土]、暗黄色土(0.15m)となり、西側にはトレンチ15でもみられた後世の盛土(1.3m)が厚く堆積している。トレンチ東端の標高は39m、西端は36.9mで、比高差は2.1mを測る。またトレンチ中位にみられる傾斜変換点の標高は38.42mである。この西端の標高は後述するB区西端をみる限り、前方部と後円部の傾斜変換点ではない。またトレンチ内での墳丘の傾斜は、ほぼ後円部頂にあたるトレンチ東端から中位の傾斜変換点にかけて傾斜は10~15°となり、トレンチ中位~西端にかけては25~30°となる。

葺石は後円部からくびれ部にいたる南斜面で認められる。遺存状態は前年度調査のトレンチ5の周囲についてはよく残っているといえるが、葺石の北東及び北側、さらに埴輪列の内側にいたってはほとんど流出している。岩種などはトレンチ14・15と同様であり、葺き方は丁寧で密である。区画石列はトレンチ南端の中位部分に、標高36.94mまでは大きめの石を用いた縦方向の区画が認められる。それより上位にかけては流出しているとおもわれるため不明であ

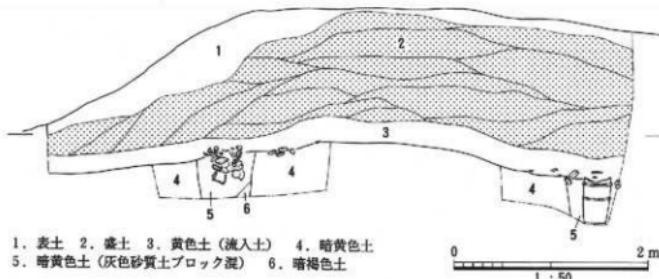


図9. トレンチ17断面図

る。横方向の区画については、明確には認められないものの、残存している縦位石列の上位部分（標高36.84m前後）から横方向に大きめの石が点在していることから、これが横方向の区画石列であった可能性もかんがえられる。充填石は埴丘掘に対して一様に直交して葺きあげられているのが看取されるが、トレンチ15のような小単位としての葺石の目通りは明確には認められなかった。なお葺石は個々の埴輪間にまで認められ、またB区埴輪列との間にも点在してみられることから、埴輪樹立後に葺かれたことは明らかである。

埴輪列はA区中央から東西方向に10本検出している（17A-1～17A-10）。いずれもタガ1段目、ないしは基底部のみの検出である。埴輪の底部径は30cm前後であり、中心間の距離は約0.4mを測る。埴輪の底部は埴丘斜面に対してほぼ平行に傾いており、傾斜角度は一様に15°～20°となっている。また埴輪は数本単位に底部設置面に段差が認められ、埴輪17A-3～17A-6と埴輪17A-7～17A-9、さらに埴輪17A-10の少なくとも3単位にわかれれる。各段差単位間の底部レベル差は約0.15mずつ低くなっている。配列の際の掘形については、トレンチ西端の断ち割り断面により幅約0.6m、深さ約0.4mの断面台形を呈する掘形が認められ、埴輪17A-6～17A-9の北側を断ち割る際には、溝状掘形の一部を確認した。掘形は埴丘構成土である暗黄色土を掘込み、埴輪設置後ただちに埋め戻しているため、掘形の形状は判然としない。埴輪17A-6～17A-9の北側の断面の層序は、暗黄色土（0.3～0.4m）下層の暗灰色粘質土、黄色土（暗灰色粘質土ブロック）、灰褐色土の互層である。掘形の底はこの互層を若干掘込んでおり、傾斜は計測部位によって異なるがおおむね30°前後である。

ただし各埴輪の底部はこの互層の面まで至っておらず、5～10cm程度上に位置している。なお埴輪の埋められている部位において、埴輪の内、下方および周囲には埴輪を固定するような作為は認められなかった。

〔B 区〕 B区はA区の北側に設けたもので、長さ2m、幅約1.8mである。トレンチ



図10. トレンチ17平面図・断面図

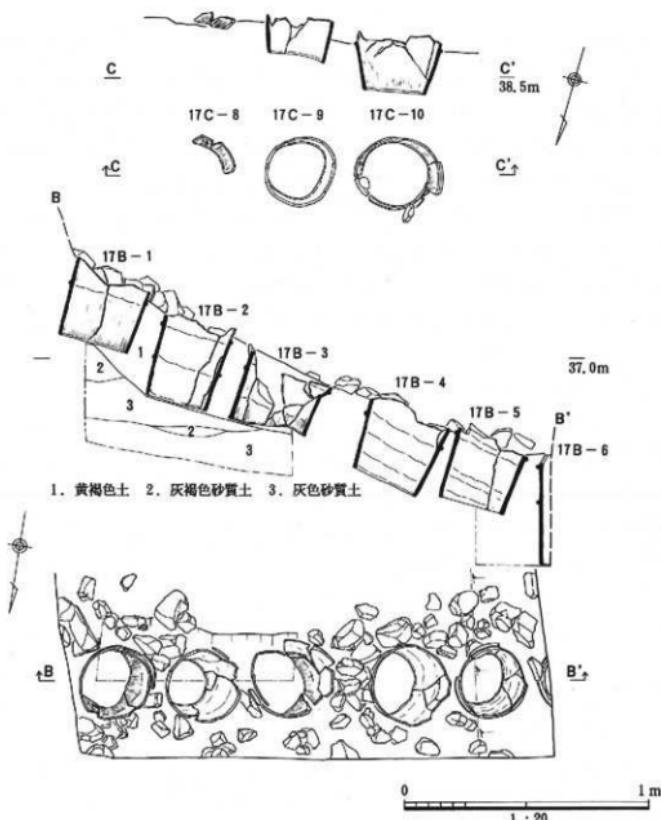


図11. トレンチ17B・C区域輪列平面図・断面見透図

内からは葺石・A区域輪列に対応する埴輪列（17B-1～17B-6）を検出している。

基本的な層序は、腐食土（0.1m）、盛土（1.3m）、黄色土（0.25m）[流入土]となり、地山は暗黄色土である。トレンチ東端の標高は37.4m、西端は36.6mで、比高差は0.8mを測る。葺石はトレンチ内全般で検出したが、流失が多くまとまりに欠けるため、区画などについて明瞭化にすることことができなかった。

埴輪列は南側で検出したA区域埴輪列と対をなすものである。前方部へ至る後円部前面で東西

方向に6本検出している(17B-1~17B-6)。全トレント中もっとも埴輪の遺存状態が良い。いずれも2段目ないしは1段目のタガまで遺存しており、葺石検出面より約0.3m下方に底部の設置面がある。なお埴輪17B-6についてはその位置を確認したのみで、取り上げなかった。埴輪の底部径は30cm前後であり、中心間の距離は約0.4m前後を測る。埴輪列の検出状況は埴輪17B-6以外はA区とほぼ同様であり、底部が墳丘斜面に対して平行に傾いている。傾斜角度は一様に15°前後で埴輪17B-1、埴輪17B-2~17B-5、埴輪17B-6の3単位の段差が認められる。単位間の底部レベル差は前2者が約0.15m、後2者については約0.21mを測る。なお埴輪17B-6については、埴輪17B-5までと違い、垂直に立った状態で検出された。位置的に後円部下端から前方部に至る地点にあたり、前方部上段面の最東端に相当すると考えられる。掘形については、A区と同様の規模をもち、断面が台形を呈するものとおもわれる。埴輪17B-1~17B-3の南側を断ち割る際には、溝状掘形の一部を確認したが、掘形の形状は判然としない。断面の層序は暗黄色土(0.25~0.3m)下層の灰色砂粘質土、灰褐色砂質粘土の互層である。掘形の底はこの互層を0.1m程度まで掘込んでおり、15°前後の傾斜をもった階段状に掘削されている。埴輪17B-1~17B-3の底部はこの互層の上面・掘形底に位置している状況が看取される。なお掘形内において、埴輪の内、下方および周囲には埴輪を固定するような作為は認められない。

〔C区〕 C区は後円部北西の墳頂部に設けたもので長さ約3m、幅約4.5mである。トレント内からは後円部をめぐる埴輪列(17C-1~17C-7)と、B区埴輪列の東延長線上に位置する埴輪列(17C-8~17C-10)を検出している。埴輪は腐食土(0.1m)直下の黄色土~淡黄灰色土で検出した。トレント東端の標高は39.0m、西端は38.65mで、比高差は0.35mを測る。葺石はすべて流出したものとみられ、まったく検出しなかった。

埴輪列は後円部をめぐる一群(17C-1~17C-7)および後円部前面の一群で、B区の埴輪列の東延長線上に位置する一群(17C-8~17C-10)を検出している。

墳頂部埴輪列はいずれも基部のみの検出である。埴輪自体の底部径は25cm前後であり、中心間の距離は約0.4mを測る。トレント15で検出したような溝状の掘形については明確には認められなかった。なお確認された埴輪列のうち、埴輪17C-2は小片であり、立った状態では検出していない。埴輪自体の底部径は25cm前後、底部検出高はおおむね39.1m~39.2mである。後円部前面の東西方向に伸びる埴輪列は基部、ないしはタガ一段目までの検出である。埴輪自体の底部径は25cm前後であり、中心間の距離は約0.4mを測る。埴輪の底部はこれまでのA・B区の埴輪列にみられるような、墳丘斜面に対して平行に傾いているのとは異なり、3本すべて垂直に立った状況で検出した。また埴輪底部の設置については、各底部のレベル差が0.1mあり、階段状となっている。

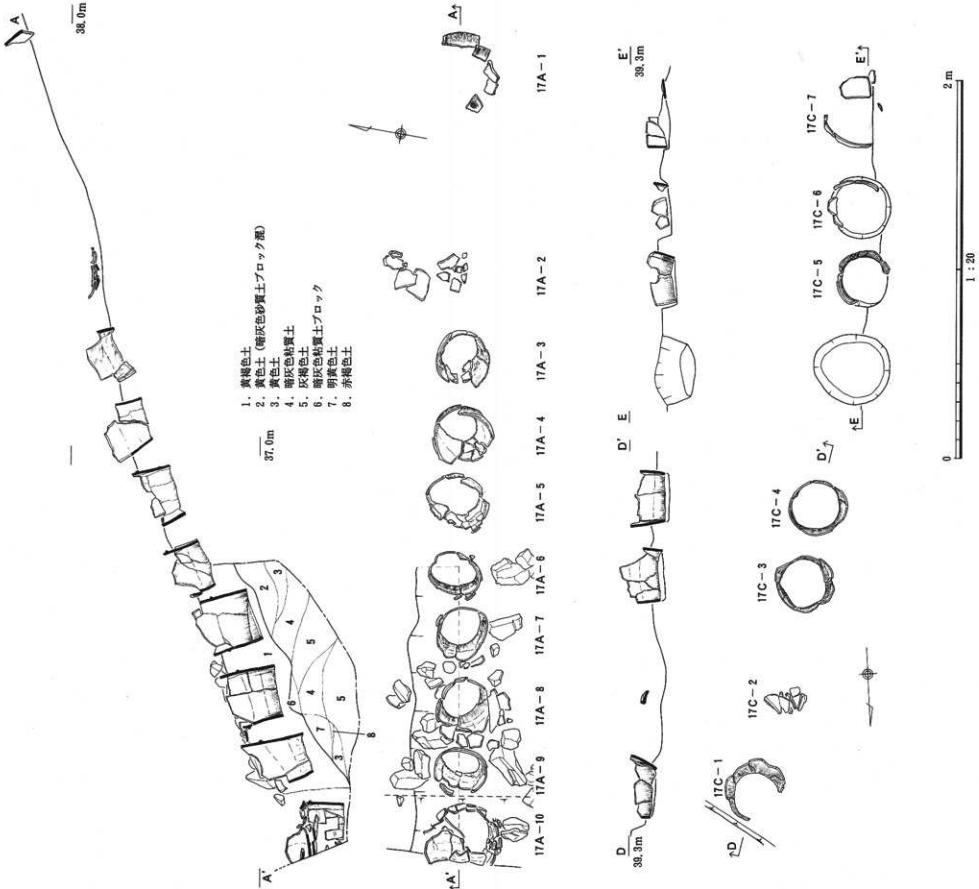
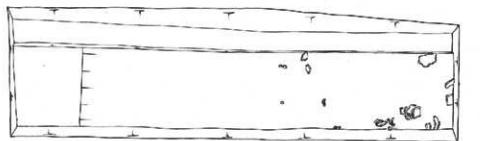
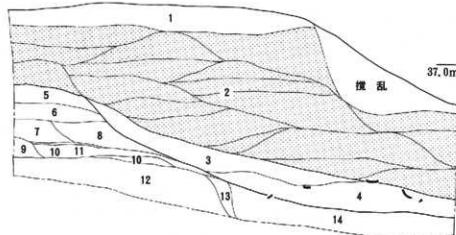


図12 レンチ17A・C断面図・断面見通図

トレンチ18（図13）

トレンチ18は前方部中ほど、北斜面に設けたもので、長さ4.7m、幅1.4mである。層序は、腐食土（0.2m）、盛土（0.8~1.8m）、黄色砂質土～暗灰黄色土（0.4m）[流入土]である。トレンチ南端の標高は36.6m前後、北端の標高は35.4mを測る。埴丘北斜面は後世に土を盛られる以前に大きく崩落・流失していると思われ、築造当初の斜面は明確でなく、葺石も検出されなかった。埴輪についても埴頂部に遺棄した状態で若干の破片が認められただけである。またトレンチ北端では検出レベル35.5m前後で埴輪が散乱した状況で出土した。これらの埴輪は埴頂部から崩落したものとも考えられるが、確認した後内部の北側テラス部の標高が35m前後であることから、あるいはテラス部埴輪列の可能性もある。



1. 腐食土	8. 黄色土
2. 盛土	9. 白黄色土
3. 暗灰黄色砂質土（流入土）	10. 暗褐色土
4. 黄色砂質土（流入土）	11. 黄褐色土
5. 明黄褐色土（白色粘土ブロック混）	12. 白灰色砂質土
6. 白色粘質土	13. 茶褐色砂礫混土
7. 赤褐色砂質土	14. 墓灰色砂質土

図13. トレンチ18平面図・断面図

#### トレンチ19（図14）

トレンチ19は前方部西端寄りに南北に設けたもので、長さ7.3m、幅2.0mを測る。層序は腐食土（0.1m）、白黄色土（0.2m）、明黄色土（0.1m）となり、地山は黄色土である。トレンチ内では葺石は検出されなかったが、前方部上段埴輪列の一部と考えられる埴輪（19-1、19-2）を検出した。トレンチ南端では傾斜が15～20°の前方部南向きの斜面を検出したが、また葺石も検出されず、埴丘築造時の状態とは考えられない。

埴輪19-1、19-2はいずれも基部のみの検出である。埴輪の設置面は埴輪19-1が35.95m、埴輪19-2が36.0mである。なお埴輪19-1、19-2に連なる他の埴輪は流失したためか検出されなかった。

#### 遺物（図版第16～22、図15）

円筒埴輪・壺形埴輪・家形埴輪などが認められたほかには、朝顔形埴輪および形象埴輪の基部の破片なども少量出土している。また埴輪以外の遺物としては、土師器が若干出土している。なお今年度の調査で検出した遺物は現在整理中であるため、今回は整理がある程度終了したもの、または後円部各トレンチから出土した埴輪の一部について報告する。また、これらの遺物および、その他の遺物の詳細については整理が終了した後に、機会を改めて報告する。

トレンチ13からは土師器（1～5）、家形埴輪（12～25）が出土している。1～5はトレンチ13の東拡張部から検出した。1は小型の器台であり完形に復原される。口径6.7cm、底径7.8cm、器高5.2cmを測り、裾部が緩やかに外反する脚部に内窵気味に立ち上がる受部が付くものである。調整は受部・脚部の内面はナデ、外面は縦方向のヘラ磨きを施す。色調は明灰褐色を呈し、胎土にはチャートなどの微少な疊が多く認められる。2～4はいずれも受部を欠失している。2は底径12.9cm、残存高5.1cmを測る。脚部は緩やかに外反し、中位で傾斜を緩やかにして端部へと至る。調整は内面がナデ調整で粘土接合痕が認められる。外面はハケ調整の後なでている。色調は明灰褐色を呈する。3は底径13.2cm、残存高4.6cmを測る。脚部中位で段を有し、端部へといたる。内面はナデ調整し、粘土接合痕が認められる。外面の調整は不明である。色調は灰黄色を呈し、胎土にはチャートなどを多く含む。風化が著しい。

4は底径11.0cm、残存高4.7cmを測る。脚部は直線的に端部にいたる。内面はナデ調整で粘土接合痕が認められる。外面は不明である。色調は明灰褐色を呈し、胎土にはチャートなどを多く含む。風化が著しい。5は蓋状の形態を呈する土製品であり、口径9.2cm、器高4.3cmを計る。外面中央にはつまみ状の突起を付し、上端部は指で押しつぶしたような形をとっている。内外面ともなでて仕上げている。

つまみ部内面は上端側へ窪んでいる。色調は明灰褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含んでいる。家形埴輪12～25はトレンチ13中央部から検出した。残存しているほとんどのものは屋根の部

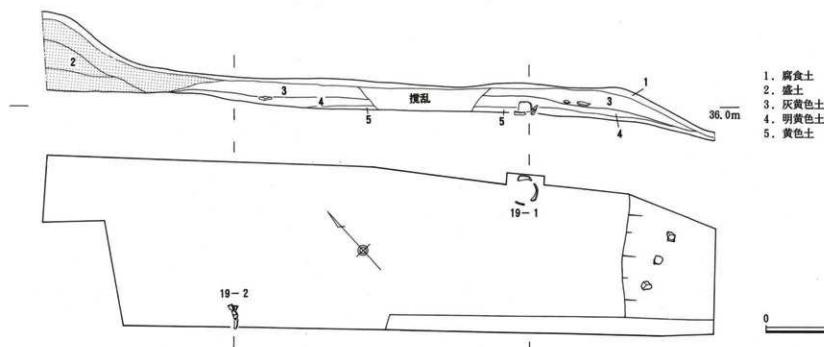
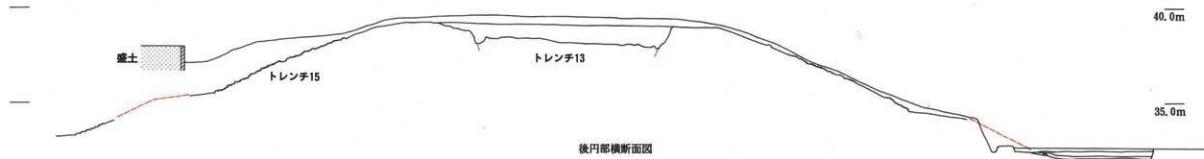


図14. トレンチ19平面図・断面図および墳丘横断面図

材である。なお形状は、入母屋の屋根を持つ高床式である。

12は屋根の部材である。上屋には棟木の表現がみられる。また下屋では壁に窓の一辺が認められる。外面には細部を表現するようなヘラ書きは認められない。調整については外面は丁寧になでて仕上げているが、内面では各部材間の接合痕が明瞭に認められる。13~25は壁部材である。このうち13・14・17・18・21は壁部材の四隅にあたる柱の箇所であり、15・16・19・20には窓の切り込みがみられる。13・17・18・21には柱を表現するとみられる段差が認められる。22は床部分にあたると思われ、部材13と接合する。23~25は基部である。ただし24、25については他の部材とは器壁の厚さなどが明らかに異なっていることから、別個体による可能性がある。各部材の色調はおおむね明黄白色を呈し、胎土はチャートをはじめとした微砂粒を多く含む。なお家形埴輪片についてはこれらの他にも多数検出しているが、ほとんどのものが小片である。

トレンチ14から検出した円筒埴輪には6・26~30がある。6はトレンチ14で検出した埴輪14-9、26・27は14-1、28は14-4、29は14-6、30は14-7、31は14-9であり、このうち6・31がテラス部の埴輪である。これらのうち外面調整が判明するものは26・27・28がある。いずれも基底部のみの検出である。一次調整としてタテハケをほどこすが、28については二次調整としてヨコハケをほどこしている。

6は埴輪14-9であり、胴部第1段下位まで復原できる。スカシ孔は円形で基底部対で穿たれている。底径は23.8cm、基底部高14.5cm、タガは断面長方形を呈し、間隔は14.6cmを測る。体部外面はタテハケ調整し、内面がナデ調整である。色調は明灰褐色を呈し外面に黒斑がみられる。基底部からタガ1段まで遺存しておりタガ下には円形のスカシ孔が穿たれている。

トレンチ15から検出した円筒埴輪には32~40、42、44、朝顔形埴輪には36、壺形埴輪には43、41がある。円筒埴輪には38~40が15-1、32が15-2、33~35が15-4である。調整については、外面に一次調整としてタテハケをほどこすもの(32・34・35・38・39・40・42~44)がある。また外面に二次調整としてヨコハケをほどこすもの(32)、内面にタテハケをほどこすもの(32・34・38・39・40)がある。内面ではナデ調整をほどこすもの(41・43)がある。なお40については一次調整としてタテハケの後、強く斜め方向のハケをほどこしている。

今回トレンチ15で検出した壺形埴輪43は壺形埴輪の半球状の肩部とおもわれるが、埴輪列の北側でかたまって検出され、接合資料の中に埴輪15-3・4付近で検出されたものがあることから、当該部付近の埴輪が壺形埴輪である可能性が高い。

トレンチ16から検出した円筒埴輪には45~52がある。円筒埴輪は45・46が16-1、47が16-2、48~50が16-3である。調整については、外面に一次調整としてタテハケをほどこすもの45・46がある。内面ではタテハケをほどこすもの45・46・48・51がある。

トレンチ17A区から検出した円筒埴輪には7・53~63がある。円筒埴輪は53・54が17A-2、55が17A-3、56が17A-4、57・58・60が17A-7、7が17A-8、59・61が17A-9である。調整については、外面に一次調整としてタテハケをほどこすもの（7・53~57・59・61~63）、外面に二次調整としてヨコハケをほどこすもの（53・54・59・61・62）がある。内面にはタテハケをほどこすもの（7・56~58・60・63）、ナデ調整をほどこすもの（53・54・59・61・62）がある。なお55の埴輪の内面調整はヨコ～ナナメハケである。

トレンチ17B区では円筒埴輪8・9~11がある。8は埴輪17B-1であり、タガ2条目まで復原される。底径は28.5cm、基底部高は19.5cm、タガは断面台形を呈し間隔は15.7cmを測る。体部外面はタテハケによる調整をほどこす。内面はタテハケをほどこしたのち、基底部中位より上方はナデをほどこす。色調は明灰褐色を呈し、外面には黒斑がみられる。

9は埴輪17B-2であり、胸部第3段中位まで復原できる。スカシ孔は円形で胸部第2段に穿たれている。底径は24.3cm、基底部高15.5cm、タガは断面長方形を呈し、間隔は14.6cmを測る。体部外面はタテハケ調整し、内面はナデ調整である。色調は明灰褐色を呈し、外面に黒斑がみられる。

10は埴輪17B-4であり、胸部第1段中位まで復原できる。底径30.4cm、基底部高20cm、タガは断面台形を呈する。体部外面はタテハケ調整し、胸部第1段からヨコハケ調整をほどこす。内面はナデ調整である。内外面ともに粘土接合痕が明瞭に認められる。なおタガの剥離面には刺突痕がみられる（10'）。色調は明灰褐色を呈し、外面に黒斑がみられる。



図15. 墓輪17B-2のヘラ描き

タガは断面台形を呈する。体部外面はタテハケ調整し、内面はナデ調整である。内外面ともに粘土接合痕が明瞭に認められる。胸部第1段目には格子状のヘラ描きがみられる（図15）。色調は明灰褐色を呈し、外面に黒斑がみられる。

トレンチ17C区から検出した円筒埴輪には64~75がある。円筒埴輪は64が17C-1、65が17C-2、66が17C-3、67・68・69が17C-4、70が17C-5、71が17C-6、72~75が17C-10である。調整については、外面に一次調整としてタテハケをほどこすもの（64・66・67・

69・70～75)、二次調整としてヨコハケをほどこすもの(64・72～74)がある。内面にはタテハケをほどこすもの(64・67・69～75)、ナデ調整をほどこすもの(66)がある。なお埴輪70は基底部に円形のスカシ孔を穿っている。こうした形状の埴輪は後円部墳頂部で検出したなかでは唯一のものである。

#### 小 結(図14、表1、付図)

今回の調査では郡家車塚古墳の内部施設・外部施設の様相について多くの知見を得ることができた。そこで今年度の調査成果を中心に古墳の全体像について簡単にまとめておきたい。

##### 1) 内部施設

トレンチ13の調査より、主体部が2基存在することが判明し、そのうちの第一主体が粘土櫛であることが明らかとなったのは大きな成果であった。

今回の第1主体の調査では墓壙の肩部、棺被覆粘土の南北の小口部とその両下端にみられる砾石群などを検出したが墓壙底部・木棺の設置状況および全長など、粘土櫛全体の構造については未確認である。そこで他の古墳の粘土櫛資料を参考として、内部構造について若干の推測を試みてみたい。

推測するにあたって、墓壙内の構造については、郡家車塚古墳がある弁天山古墳群中の資料が参考になると思われる。弁天山古墳群中で郡家車塚古墳に時期的にもほど近く、さらに礫敷きを持つ粘土櫛としては弁天山C1号墳前方部粘土櫛に良好な資料がみられる。

報告によると棺床粘土は墓壙底に直に設置し、砾石を墓壙全面に棺底の高さまで敷き詰めた後、棺被覆粘土をこの砾敷きの上から覆っているとされる。また木棺の設置部位については、棺床粘土・被覆粘土の小口部両端が隆起しているところから内側へ、粘土が水平になった地点に棺の両端が位置するとしている。郡家車塚古墳の墓壙内の構造がこれと同じであると断定することはできないが、被覆粘土の小口部の両端などをみるとかぎり、同様な構造であると考えてもよいであろう。そこで当該部の木棺全長をかんがえるのにあたって参考になると、小口部の両端から後円部中心方向に、粘土が水平になっている箇所が認められる。この近辺に木棺の両端が位置するとすれば、推定される木棺の全長は7.5～8mに相当することになろう。

第2主体では墓壙両端に粘土を検出したが、内部は未確認であることから、粘土櫛か、木棺直葬であるかは判断できない。ただし図3の断面をみる限りでは埋葬部へ至る粘土の傾斜が緩く、被覆粘土ともみられることから、粘土櫛とかんがえておきたい。

また第2主体は前述したとおり、第1主体が構築された後に掘込まれている様子が土層断面より看取される。さらに墓壙内の封土は墳頂部上面にみられる黄色土と同質であることから、第1主体を構築した当初の後円部墳頂面は、黄色土下層の淡黄灰色土であったとかんが

えられる。なお墳丘測量図にみられる39.5mのコンターラインは黄色土であり、土層断面および埴輪の検出レベルから勘案される第1主体構築時の墳丘の高さは、およそ39.2m前後と推定される。

なお第1主体と第2主体の位置関係であるが、測量図をみると第1主体は後円部墳頂の中心よりわずかに西にずれている。これは第2主体の埋葬を当初から予定に入れていたものとかんがえることもできよう。

## 2) 外部施設

後円部北側の葺石を検出したことにより、後円部の形状が明らかとなった。また今回前方部頂を確認したことから、前方部と後円部の比高差が判明した。さらに後円部をめぐる埴輪列と、前方部へのびる後円部前面の埴輪列を検出するなど、郡家車塚古墳の築造時の墳形を復原するうえで欠かすことのできない資料を得られた。

後円部墳頂の直径については、各トレンチより確認された葺石の傾斜を墳頂へ引き通すことにより求めると、約17.8mという数値が得られる。つぎに東側と北側の墳丘上段斜面および葺石を、墳丘東側では墳丘下段葺石の天端石を検出している。そこで東側と北側の上段裾部とテラス幅などから求められるそれぞれの直径は、上段裾の直径は約36.8m、下段上端の直径は約43.2m、後円部下段裾の直径は約51.3mである。

またトレンチ15と昨年度調査のトレンチ7から、後円部北側の全比高を算出すれば約6.02mとなり、墳頂部～上段裾までが3.74m、上段裾～下段裾までが約2.28mである。両者の比高差の比率をみると約1.6:1となり、上段と下段の斜面比は約2.2:1となる。なお昨年度調査のトレンチ1・4からなる後円部南側の各比率は、前者が2.2:1、後者が2.8:1である。この南北の差は、北側が1m高いという原地形の高低差に起因するのであろう。

葺石の施工による作業単位については、葺石の施工単位が上下の2単位に大きく分けられることがわかり、前年度の調査結果を追認するものとなった。またトレンチ15でみられるような、上位の葺石の小単位については方向性・角度を元に、石の目通りをもって認識したものである。この単位は基底石と区画石によって区分された区画とは別に、葺石施工者単位のレベルに属するものであろう。

なおトレンチ15では斜距離にして約1mづつの単位で目通りを変更して石を葺いていたことがわかった。

前方部については、これまで墳頂部が流失していると思われていたが、トレンチ18・19の土層断面より、墳丘測量図にみられる北側の高まりは後世に池を造った際、排水を墳丘に置いた盛土であることがわかった。また盛土は水平に積まれていることから墳丘を堤防代わりに使用したのであろう。前方部の高さについては、トレンチ18の土層断面およびトレンチ19

で検出した埴輪19-1、19-2の設置面からわかる埴頂部標高は36.5m前後である。これにより後円部埴頂との比高差は3m前後となることが明らかとなった。

図14は今回までの調査結果から想定した前方部の横断面である。この埴丘想定線をもとに、後円部と同じ方法で上段と下段の比高差比率、斜面比率を計算するところは1:1~1.5:1の比率になる。ただし今回の前方部のトレンチ調査では葺石を全く検出しておらず、埴丘斜面の傾斜角などについては明らかにすることはできなかった。今後の調査における、さらなる検証を待つべきであろう。

埴輪列については、トレンチ14・15・16・17の調査より後円部埴頂をめぐる埴輪列を検出している。埴輪列はトレンチ17のC区をみると後円部埴頂部を一周する埴輪列に前方部へと連なる埴輪列がコの字状にとりついている。

埴頂部の埴輪列は、各埴輪の中心を引き通すと直径16.1m、円周50.24mの円が描ける。そこで各トレンチより確認された埴輪間の距離を換算すると後円部埴頂には約126本の埴輪が並んでいたことになる。埴輪の種類は現段階では円筒埴輪と壺形埴輪、朝顔形埴輪などが認められる。なお昨年度のトレンチ5のテラス部で出土した鰐付円筒埴輪については、今回の埴頂部の埴輪列では検出されなかった。円筒埴輪と壺形埴輪、朝顔形埴輪の配列単位については、出土埴輪の分析をとおして検討していきたい。

埴輪の設置方法はトレンチ15・17A・17Bより溝状の掘形を掘削した後に設置したことが明らかになった。このうち後円部前面にあたる17A・17B区の掘形は階段状の段差をつけ、掘削している状況が認められる。なお当該部の埴輪は底部が埴丘斜面に平行に、一様に傾斜させ、さらに3本ないし4本の単位ずつ底部に段差をつけて設置したかのような状況を呈している。しかしながらこのような設置は他に類例もみられず、工法上にも不安定な上、固定しておく作為も掘形中には認められない。さらに埴輪17C-8・9・10および17B-6は垂直に立った状態で検出されていることなどから、傾斜させて埴輪を配置させたと積極的に理解する根拠はいまのところ認められない。現段階では後円部前面の埴輪列は、すべて垂直に立てたものと理解したい。

つぎに後円部頂と後円部前面の関係であるが、まず17C区の埴輪列から後円部埴頂と後円部前面との境は埴頂部埴輪列により遮断されていたとかんがえてよい。また後円部前面の埴輪列で仕切られた部分は、葺石が葺かれていたことが判明しており、17B区にみられる葺石などから埴輪列間より外に葺いている石と同質な石を用いている。以上のことから後円部前面の埴輪列で仕切られた部分には内外を区別するような施工上の特別な配慮はみられず、また後円部埴頂との境は遮断されていることから、この部分は、墓道としての明確な意識はしていないかったものと推測される。

前方部の埴輪については17A区の埴輪列に対応すると思われる埴輪19-1がトレンチ19に認められる。しかし同トレンチ内には19-1に対応する埴輪は認められない。

また埴輪19-2については昨年度の調査により、前方部は当該部より西に伸びることが想定されていることから、埴輪19-2については前方部上段西端面に位置する埴輪列とはかんがえられない。また今回前方部では主体部の存在に関しては確認できておらず断定はできないが、あるいは埴輪19-2が主体部に伴うものとする可能性もかんがえられる。こうした点も今後の調査によって解明されるべき事項であろう。

以上、今回の調査で新たに判明したことを記したが、昨年度までの課題についても一定の解答を得られたのは大きな成果であった。しかし同時に新たに浮かび上がった問題も少なくない。後円部に関する資料は一定出されたと思えるが、前方部に関する資料がいまだ少ない点は、当面の課題といえる。特に墳丘の南北斜面においての葺石の検出とその傾斜角、およびテラス部の確認などは、古墳の墳形を復原するうえで欠かすことのできないものである。さらに前方部における主体部の有無の確認なども無視できない問題であり、今後の調査はこのような問題の解明を含めた古墳の全体像を解明していくことが急務とされるであろう。

こうした調査から得られた結果は、畿内における前期末～中期初頭における前方後円墳に

郡家車塚古墳		墳丘南面	墳丘北面	墳丘東面
後 円 部	上 段	上 端 39.06(25°) [T4] 裾 部 39.57(30°) [T4]	39.28(20~25°) [T15]	39.0(20~25°) [T14]
	下 段	上 端 34.2 [T4] 裾 部 32.3 (15°) [T1]	35.54(26°) [T15] 33.26(20°) [T7] 32.24(25°) [T7]	34.2(20~25°) [T14]
く び れ 部	上 段	上 端 36.7(20~30°) [T17A] 裾 部 34.74(30°) [T5] 34.6 [T6]	36.5 [T17B]	
	下 段	上 端		
		裾 部 32.16(10°) [T2]	33.25 [T7]	
				墳丘西面
前 方 部	上 段	上 端 36.0 [T19] 裾 部	36.58 [T18]	
	下 段	上 端		34.74(20°) [T9] 34.6(18°) [T10]
		裾 部 32.13(12°) [T3]	33.3 [T7]	

数字の単位はm、( ) は葺石の傾斜角度、[ ] はトレンチ番号、\_ は調査区端の高さ

表1 調査区分別標高測定値および葺石の傾斜角度一覧

ついて、ひとつの貴重な資料を加えることになるのは間違いないであろう。 (中村)

[追記]

なお、この報告を作成している間も部分的に調査は継続しており、その成果については、機会を改めて報告するつもりである。

## II 島上郡衙跡

### 2. 島上郡衙跡（18-G地区）の調査

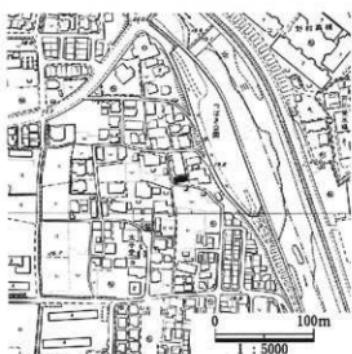


図16. 18-G地区調査位置図

シルト〔地山〕となる（図16）。

今回の調査区では明確な遺構・遺物は検出することができず、新たな知見を得ることができなかった。

（中村）

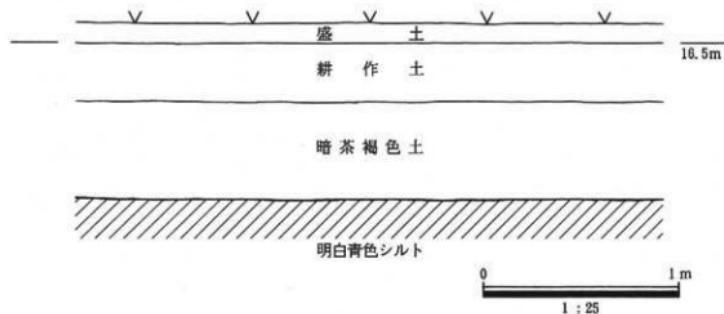


図17. 18-G地区土層模式図

### 3. 島上郡衙跡（42-A地区）の調査

調査地は高槻市郡家新町494-3にあたり、小字名は中野である。現状は水田である。今回、個人住宅建設工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

当該地は今城塚古墳の東約200mに位置する。ここは郡衙推定郡庁院から西約600mの地点にあり、調査当初は郡衙域の西辺地域における土地利用状況が明らかになると期待された。ところが、墳丘を削平され周溝のみ残るいわゆる埋没古墳が新たに発見され、隣接地の調査成果を含めると、少なくとも3基の小規模な古墳の存在が確認され、この一

帯にこうした古墳が濃密に分布していたことが予想された。かつて、周辺に残る「掛塚」の地名から埋没古墳の存在の可能性が指摘されていた（『高槻市史 第一巻本編I』312ページ）ことから、これらを「掛塚古墳群」として扱うこととし、本稿では隣接地でおこなわれた一連の調査（図19 B区・C区・D区）も一括して報告する。

調査地は、近代に耕地整理がおこなわれたため、耕作土・床土（約0.3m）の直下は黄灰色粘土の地山となる。だが、地山面の標高は一枚あたりの水田ごとに異なり、A区は19.9m、B区は19.7m、C区・D区では床土の下に整地土がみられ19.2mである。いずれも南側にむかって緩やかに傾斜している。

遺構（図版第23～28、図19～21）

検出した遺構は、古墳3基、溝、土器棺などである。以下その概略を記す。

#### 1号墳

C区およびD区で検出した一辺15mの方墳で、墳丘ならびに主体部は削平されて存在しない。周溝幅は4.0～3.0m、深さは0.4～0.2mと非常に浅く、D区では部分的にしか確認し得なかった。

周溝からは土師器・須恵器・埴輪とともに奈良時代の土器類も出土している。1号墳の築造時期は出土した土器などから5世紀中頃とみられる。

#### 2号墳

2号墳は、C区北部で周溝の西側のみを確認した方墳である。規模は一辺7mに復原できる。周溝幅は1.8～1.5m、深さは0.3～0.1mである。



図18. 42-A地区調査位置図

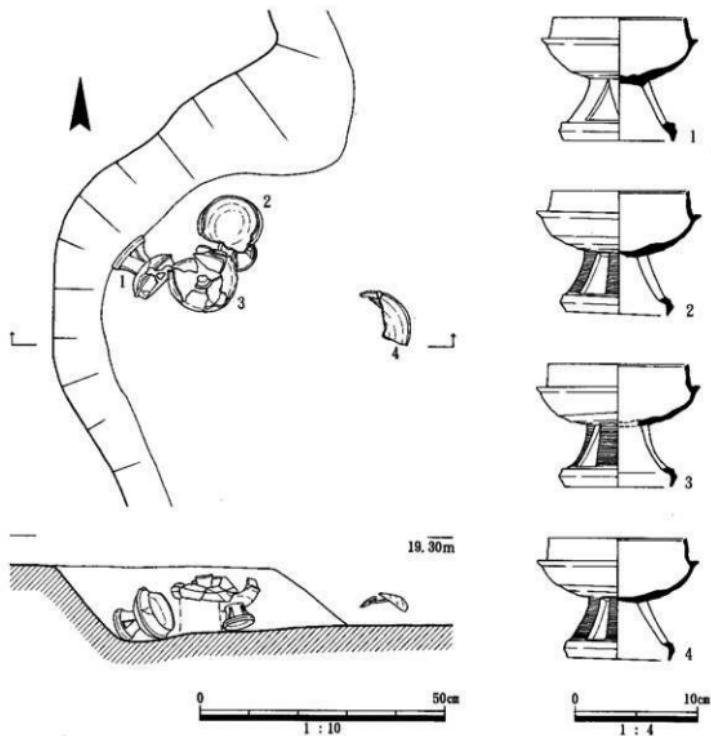


図19. 掛塚2号墳高杯出土状況図・実測図

周溝の南屈曲部の底部付近から、須恵器有蓋高杯が4個体まとまって出土している。そのほか、周溝埋土からは土師器・須恵器・埴輪および、奈良時代の土器類が出土している。2号墳の築造時期は出土した須恵器から5世紀後半頃とみられる。

### 3号墳

3号墳はB区およびA区でその大半を検出できたが墳丘・主体部ともに存在しない。直径15mの円墳だが、周溝の形状がやや不定形で特異である。墳丘をめぐる幅4.0~3.0mの周溝は、南西部にあたるA区では幅約6mと広く矩形に曲り、張り出しているように見える。当初はA区とB区の間部分に造り出しの存在を想定し、帆立貝式古墳の外周をめぐる馬蹄形の周溝ではないかと思われた。だが、B区西側を拡張した結果、墳丘外周には造り出しが存在せず、また

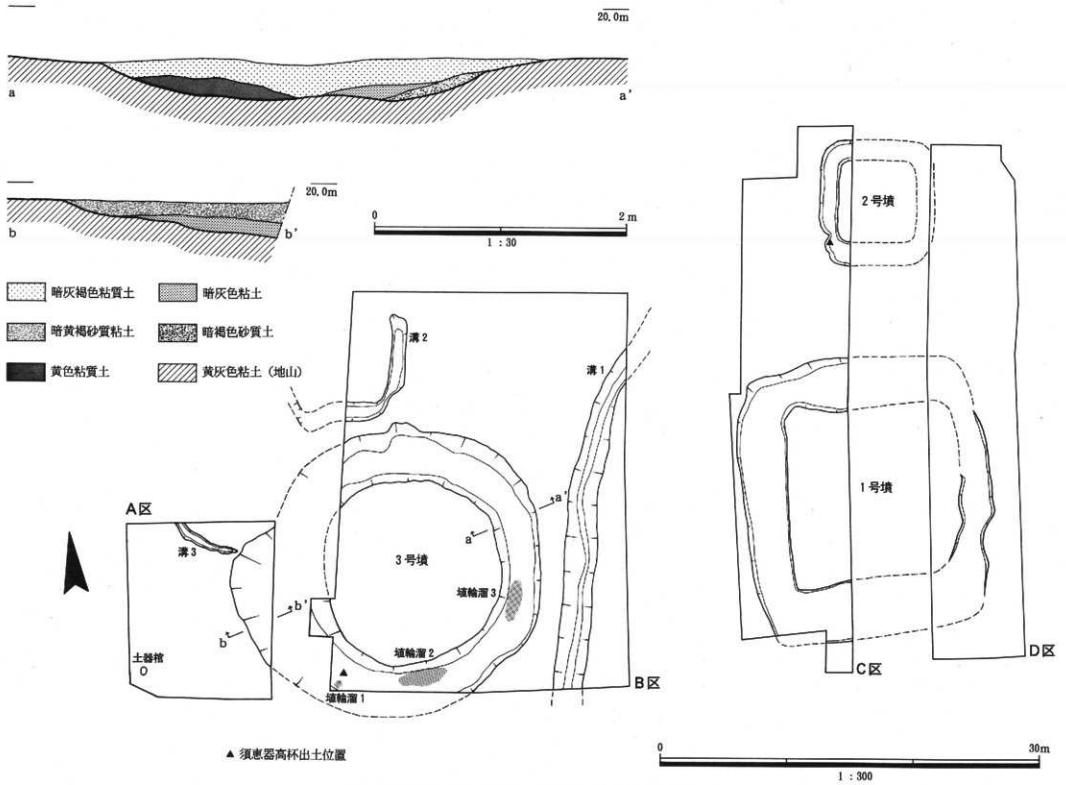


图20. 岛上郡衙跡（42-A地区）（掛塚古墳群）土層図・平面図

A・B区間の水路底部では周溝外周の未発掘部分を確認できたため、非常に不定形な平面形を呈することがわかった。

ただ、こうした形状は、検出面の標高がA・B区で異なっているため、みかけ上この様に見えるのかもしれない、築造当初からこのような形状であったかは疑問である。周溝の深さは0.5~0.3mを測る。

周溝からは多くの遺物が出土している。周溝底部では、3ヵ所の埴輪溜がみられ、その中には蓋形埴輪をはじめとする形象埴輪が多数含まれている。また須恵器の杯や無蓋高杯もみられる。そのほか埋土からは土師器・須恵器・埴輪などが多量に出土し、これらとともに、奈良時代の土師器・須恵器も多く出土している。3号墳の築造時期は5世紀中頃とみられる。

#### 溝 1

3号墳の東側を南北に走る溝である。幅2.5~1.5m、深さ1.0mの断面V字の溝で、27mにわたって確認し、調査区外にのびている。土層の断面観察によると、埋土は大まかに3層に分かれる。つまり溝1は、最初の掘削ののちある程度土が堆積し（暗灰色系の粘質土）、再度掘削されたあと徐々に埋まっていき（有機質を含む黒褐色系の粘質土）、最後は意識的に埋められた（茶褐色砂質土）ものと推察できる。

遺物としては、土師器・須恵器・埴輪などが多量に出土しており、これらとともに奈良時代の土器、あるいは弥生土器の細片もみられる。

この溝1が最後に埋められたのは出土した土器から奈良時代であることは明白だが、最初に掘削された時期は、下層から遺物がほとんど出土せずはっきりしない。

#### 溝 2

3号墳の北で検出した鍵の手に折れ曲がる溝である。検出当初は古墳の周溝ではないかと思われたが、のちにA・B区間の水路底で西側延長部を確認したところ、かなりの角度をもつことがわかり、古墳の周溝としては扱わないこととした。幅1.2~0.5m、深さ0.3~0.1mで、埋土からは埴輪片が出土している。

#### 溝 3

3号墳の西側で検出した溝である。幅0.6m、深さ0.15mの細い溝で、埋土から5世紀代の須恵器が出土している。

#### 土器棺

3号墳の西側で検出した。長径0.6m、短径0.45mの楕円の掘形に、銚金を横倒しにして据え、高台つきの皿で蓋をしている。掘形の検出面からの深さは0.15mで、地盤がかなり削平されたことがわかる。銚金は押しつぶされた状態で出土し、これに内包されたとみられる遺物は確認できなかった。築造時期は奈良時代である。

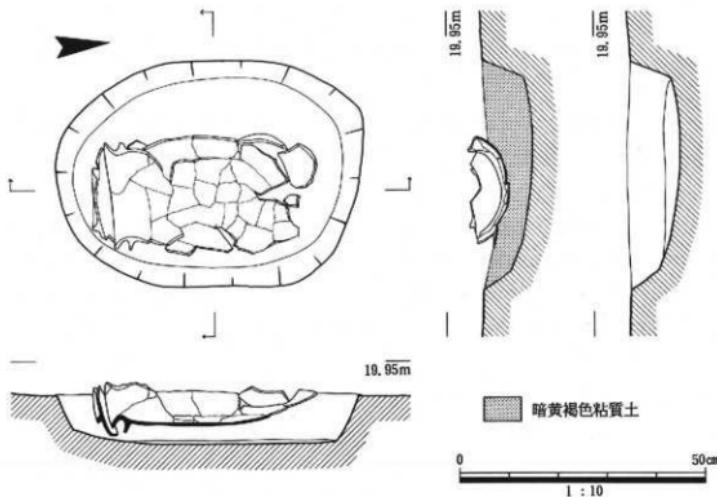


図21. 土器棺検出状況図

#### 遺物（図版第29～33、図19・22）

出土した遺物は整理箱40数個に達するが、そのほとんどは3号墳周溝から出土した埴輪である。以下、おもなものを報告する。

1～4は2号墳周溝から出土した須恵器の有蓋高杯である。たちあがりはやや内傾し、端部は内傾する面を持つ。体部のほぼ $1/3$ ～ $1/4$ にヘラケズリを施す。脚部のスカシは3方向で1は三角形、2～4は長方形で、カキメがみられる。口径は11.5～11.0cm、器高は10.0cmを測り、暗青灰色を呈する。5世紀後半の年代が与えられる。

5は3号墳周溝から出土した須恵器杯である。ほぼ垂直に立ち上がる口縁端部は内傾する面を持つ。体部のおよそ $1/2$ までヘラケズリを施す。口径は11.0cm、器高5.0cmで外面は暗青灰色、内面は暗灰褐色を呈する。5世紀中頃と思われる。

6も3号墳周溝から出土している。外反する口縁を持つ無蓋高杯で、体部に2本の稜線があり、その下に文様帯を設け柳描き波状文が横にめぐる。脚部は長方形のスカシが4方向にみられる。口径15.5cm、器高11.5cmを測り、淡灰色である。

7は土器棺の蓋に使用された土師器の皿である。端部はやや外反してまるくおさめる。大きな高台の端部もやや外反する。表面の風化が激しく調整は不明。口径23.0cm、器高4.5cmで、赤褐色を呈する。

8は土器棺に使用された土師器鉢である。外反する口縁の直下に水平の鉢がつく。体部は

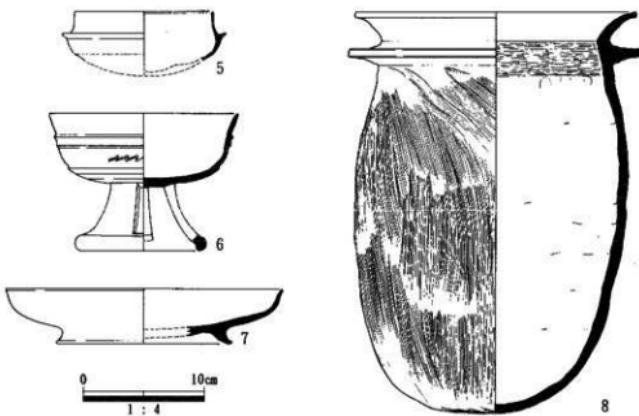


図22 遺物実測図 掘塚3号墳周溝（5・6） 土器棺（7・8）

砲弾型で底部はやや平坦である。口縁及び鋸周辺はヨコナデ、体部内面上部はヨコハケ、体部外面はタテハケを施す。口径23.0cm、最大腹径22.0cm、器高33.3cmを測り、淡褐色を呈する。7世紀末～8世紀はじめ頃に比定される。

9～18は3号墳周溝内の埴輪溜1から出土したものである。

9は蓋形埴輪の着装式の立ち飾りの中心部である。円形の受け皿の上部には4方向にのびる立ち飾りの一部が残る。下部には太い軸状の突起がつく。受け皿部の直径は18.0cm、淡褐色である。

10・11は蓋形埴輪の傘部下半である。外周に沿って分厚く縁取りしており、復原径も42.0cmと共通するが、11は全体的に中心に向かって隆起が強く、両者は別個体である。調整は不明、褐白色を呈する。

12・13も蓋形埴輪の傘部下半で、こちらは同一個体である。外周に沿って分厚く縁取りしており、外面にハケメがみられる。復原径は42.0cmで10・11と同大とみられるが、両者との直接的な関係は不明。褐白色を呈する。

14は蓋形埴輪の傘部上半と円筒形台部の一部で、上方には立ち飾りをうける円筒が造り出されている。この円筒の端部は分厚く縁取られている。調整は不明、褐白色を呈する。

15・16は形象埴輪の一部とみられる。薄い粘土帯を張り付けている。褐白色である。

17・18は円筒埴輪の基底部、あるいは蓋形埴輪の円筒形台部の基底部とおもわれる。褐白色

を呈する。

19~28は3号墳周溝内の埴輪溜2から出土している。

19~22は朝顔形埴輪で、19は外反する口縁付近、20・21・22は半球状の肩部付近であろう。

ヨコハケが施され、19は褐白色、20・21・22は明褐色である。

23は不定形な板状のもので、厚さは約1.2cmを測る。蓋形埴輪の立ち飾りの一部と思われる。淡褐色を呈する。

24~28も蓋形埴輪の立ち飾りの一部で、27・28は受け皿に接する部分である。淡褐色を呈する。

29~40は3号墳周溝内の埴輪溜3から出土した。

29~36は蓋形埴輪の立ち飾りである。粗いハケ調整がみられる。いずれも淡褐色である。

37は蓋形埴輪の傘部下半で、外周が分厚く縁取られる。調整は不明。褐灰色を呈する。

38は中空の異形の埴輪、39は中程まで中空の円錐形で先端は緩く曲がっている。人物あるいは動物埴輪の一部であろうか。褐灰色を呈する。

40は板状のもので、細かいハケ調整がみられる。家形埴輪の一部であろうか。暗褐灰色である。

41~64は3号墳周溝から出土したものである。

41~45はへら描きの線刻が縦横に描かれている。甲冑形埴輪の一部であろうか。暗褐灰色である。

46はへら描きの沈線で円弧文様が描かれており、盾形埴輪の一部とみられる。厚さ1.2cmで、暗褐色を呈する。

49~52は家形埴輪の一部とみられる。48は棟、49は軒先であろう。52にはハケがみられる。暗褐灰色である。

53~58は円筒埴輪である。断面台形の低いタガ、及びヨコハケを施すのは共通する。54・55には円形のスカシが、57・58には黒斑がみられる。54は明褐色、56は褐白色、53・55・57・58は暗褐灰色である。

59・60・63・64は断面が三角形のタガを持つもので、形象埴輪の基部であろう。59・63・64には円形のスカシがみられる。いずれも褐白色である。

61・62は円筒埴輪の基底部である。黒斑がみとめられるが、調整は不明。褐白色である。65~73は溝1から出土した。

65・66は家形埴輪の一部とみられ、65は屋根の棟の部分、66は軒先にかかる部分とみられる。明褐色である。

67は全体が緩く内湾し、外面には一条の沈線を施す。形象埴輪の一部であろう。明褐灰色である。

68・69は蓋形埴輪の立ち飾り、70は傘部下半の外周部である。いずれも淡褐色である。

71は円筒埴輪で、タテハケののち、ヨコハケを施す。タガは断面が台形でひくい。淡褐色を呈する。

72は須恵器杯である。斜め上方にまっすぐにのびる口縁の端部はまるくおさめる。底部には小さめの高台がつく。復原径9.5cm、器高3.5cmを測り、淡灰色である。

73は土師器の甕である。外反する口縁の端部は軽くつまんで面をなす。外面はタテハケ、内面はナデて仕上げる。復原径は25cm、暗褐色を呈する。

### 小 結

今回の掛塚古墳群の発見により、今城塚古墳の東側一帯には5世紀中頃から6世紀初めの小規模古墳が密集して存在していたことがわかった。今城塚古墳の北東側には、方墳と土壙基群を伴う狐塚古墳群が存在し、今年度の調査でも新たに方墳が確認されている〔「鳩上郡衙跡(11-C・D・G・H・K・L地区)の調査」参照〕。今城塚古墳の東側及び北東側一帯は、5世紀から6世紀初にかけては一大墓地であったといえよう。小規模の古墳とはいえ、蓋形埴輪などの形象埴輪が出土していることから、これらの古墳の被葬者は在地の有力者であろう。

こうした小規模古墳群の西側に、6世紀の前半、突如として真の繼体陵とみられる今城塚古墳が築造される。それ以前の古墳とは規模も様相もまったく異なる、巨大な大王陵が造られたのである。これ以降、小規模古墳はこの地域ではつくられなくなる。こうした古墳群の変容は、今城塚古墳の築造に代表される社会情勢の変化を反映したものといえる。大王陵を、あえて在地の有力者の墓地に築造したのは、三島地方と繼体大王とのつながりを考えるうえで興味深い。

一方、現段階では掛塚古墳群の埴輪がどこで焼かれたものかは不明である。しかし、狐塚古墳群では新池埴輪窯産とされる埴輪があり、掛塚古墳群出土の埴輪を新池産とする確証はないが、その可能性も否定できない。5世紀中頃から6世紀初めにおいて、新池産の埴輪が掛塚3号墳のような小規模の古墳にも供給されたのであれば、この時期の新池埴輪窯に新たな視点が加わることとなる。今後胎土分析等を視野に入れたばひろい検討が必要であろう。

さて、これらの古墳は、周溝から奈良時代の土器が出土することから、この時代に墳丘の削平、周溝の埋め立てがおこなわれたのであろう。その契機としては、やはり鳩上郡衙がおかれたことによるこの地域の再開発に伴うものとみるのが妥当である。そして、この時代の土器館を検出したことから、この地域が墓地として利用されたと推測できる。土器館は掘形の深さが検出面から0.15mしかなく、かなりの地盤が削平されたとみられ、周囲にもこうした土器館が存在していた可能性が高い。

最後に、溝1は奈良時代に古墳と同様に埋められたことは確実であるが、年代の上限が不明である。再掘削をしている点からみると、かなり長い期間機能していたとみられ、古墳とも切り合いかないことから、古墳と一緒に存在していたとみられるが、どちらが先に造られたかは

不明である。しかし、この溝の性格としては、少なくとも5世紀代にこの地域の北側に展開したであろう集落の排水等の施設と推定しておく。

以上、掛塚古墳群について、若干のまとめをおこなった。今後の周辺での調査が期待される。

(高橋)

#### 4. 岐阜郡衙跡（49-B地区）の調査



図23. 49-B地区調査位置図

調査地は高根市川西町一丁目926-7にあたり小字名は川西北浦である。今回、個人住宅の建て替え工事に先立って、調査を実施した。

当該地は遺跡の縁辺部にあたり、遺構の希薄な地域である。調査は長さ3m、幅1mの調査区を設けて実施した。

基本的な層序は盛土(1.1m)、耕作土(0.1m)、灰褐色粘質土(0.4m)、地表下1.6mで黄褐色粘質土の地山となる(図24)。遺構・遺物は検出できなかったが、地山直上層の灰褐色粘質土は色調・土質から、遺物を含んでいる可能性は高いと思われる。

(高橋)



盛 土

15.0m

耕 作 土

灰褐色粘質土

黄褐色粘質土



図24. 49-B地区土層模式図

## 5. 島上郡衙跡（67-F 地区）の調査

調査地は高槻市川西町一丁目1088-8にあたり小字名は千原橋である。現状は宅地であり、今回個人住宅の建て替え工事に先立って調査を実施した。当概地は、山陽道の後身である西国街道の南約100mに位置し、造構の希薄な地域である。調査は長さ3m、幅1mの調査区を設けて実施した。

基本的な層序は、盛土（1.05m）、耕作土（0.1m）、淡灰褐色粘質土（0.35m）、明褐色粘質土（地山）である（図26）。遺構・遺物はともに検出できなかった。（高橋）



図25. 67地区調査位置図

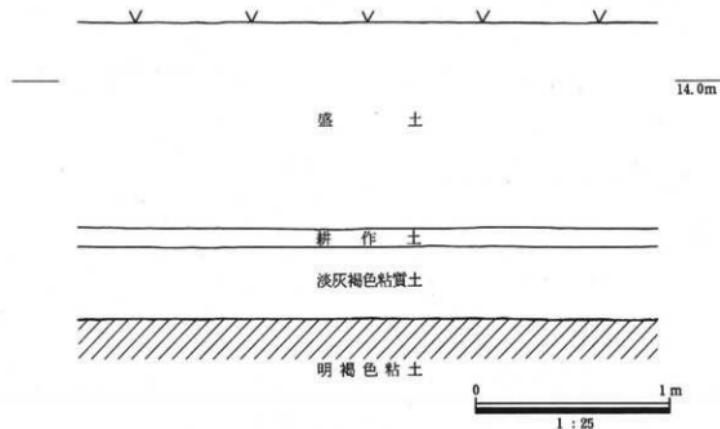


図26. 67-F 地区土層模式図

## 6. 島上郡衙跡（67-J 地区）の調査

高槻市川西町一丁目1088-11にあたり、小字名は千原橋と称する。現状は、宅地である。このたび個人住宅を新築する目的で、土木工事等を伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は本遺跡の南部に位置し、西国街道（旧山陽道）の南側約100mのところに

あたる。調査はまず遺構の確認および層序の観察をするために、申請地の北西部に  $3\text{m} \times 2\text{m}$  のトレンチを設け重機を使用して、地山面まで掘り下げておこなった。

層序は、盛土 ( $1.1\text{m}$ )、黒褐色土層 ( $0.2\text{m}$ )、青褐色粘土層 [地山] である（図27）。調査の結果、調査区が狭小なこともあって、遺構・遺物を検出することができなかった。（木曾）

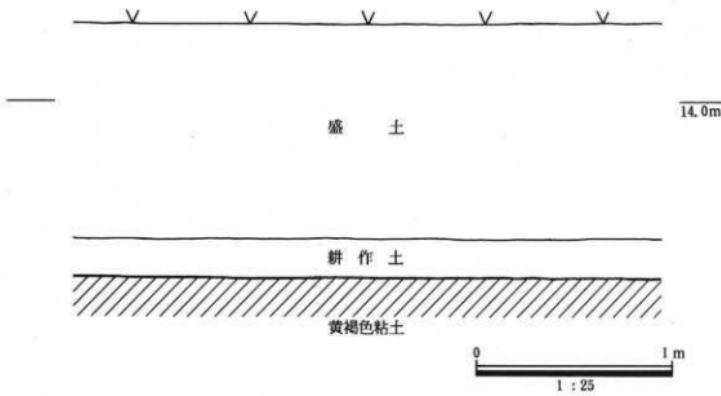


図27. 67-J地区土層模式図

#### 7. 鳴上郡衙跡（74-K地区）の調査



図28. 74-K地区調査位置図

高槻市郡家新町156-35番地にあたり、小字名は東藤ヶ本と称する。現状は宅地である。個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は本遺跡の南西部に位置し、これまでの調査結果などから弥生時代中期の方形周溝墓群と古墳群が広がっている地域にあたる。

調査は届出地の西側に  $3\text{m} \times 2\text{m}$  のトレンチを設け、重機で掘り下げながら層序を観察し、遺構の確認につとめた。層序は盛土 ( $0.5\sim0.6\text{m}$ )、黒褐色土 ( $0.2\text{m}$ )、青褐色細砂層 ( $0.1\sim0.2\text{m}$ )、青褐色粘土 ( $0.2\text{m}$ )、黄褐色粘土 [地山] であつた（図29）。調査区が極小なこともあって、遺構・遺物はまったく検出できなかった。（木曾）

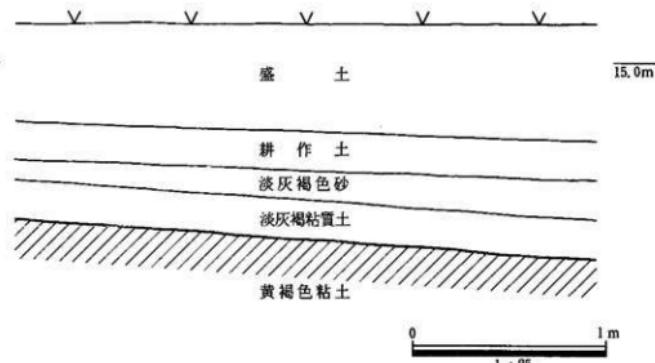


図29. 74-K地区土層模式図

#### 8. 島上郡衙跡（75-K地区）の調査

高槻市郡家新町163-47にあたり、小字名は宛本と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅を新築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関

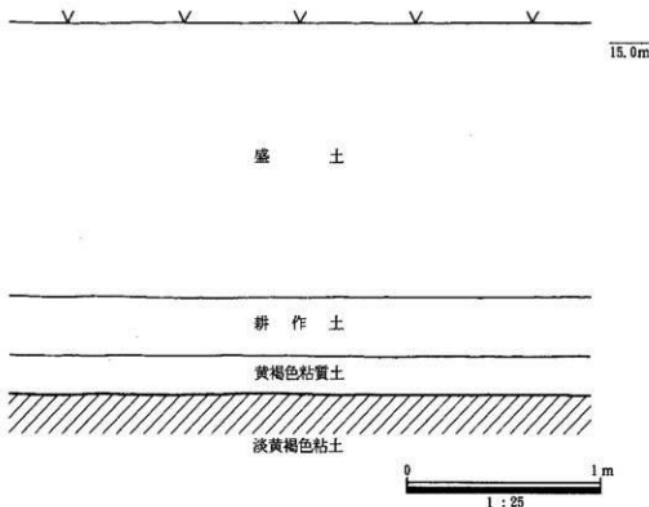


図30. 75-K地区土層模式図

係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は本遺跡の南西端に位置し、遺構・遺物の希薄な地域にあたる。調査はまず遺構の確認および層序を観察するために、申請地の西端に  $3\text{m} \times 2\text{m}$  のトレンチを設け、重機を使用して、地山面まで掘り下げをおこなった。

層序は盛土（1.2m）、耕作土（0.3m）、床土（0.2m）、灰黄褐色粘土〔地山〕である（図30）。調査の結果、遺構・遺物をまったく検出することができなかった。（木曾）

#### 9. 嶋上郡衙跡（75-M地区）の調査

調査地は高槻市郡家新町163-13あたり、小字名は宛本と称する。このたび個人住宅建設工事が計画され、土木工事に伴う発掘届が提出されたため、事前に発掘調査を実施した。現状は宅地である。

当概地は、遺跡の南部に位置し、郡衙関連の遺構は希薄ではあるが、北東約100mには川西古墳群が分布している。調査は届出地内に  $3\text{m} \times 1.3\text{m}$  のトレンチを設け、層序の観察と遺構の確認をおこなった。層序は盛土（1.2m）、耕作土（0.3m）、灰黄色砂質粘土（0.2m）となり、その下層は灰黄色粘土〔地山〕となる（図31）。

今回の調査区は極小なこともあって明確な遺構・遺物は検出することができず、新たな知見を得ることができなかった。（中村）

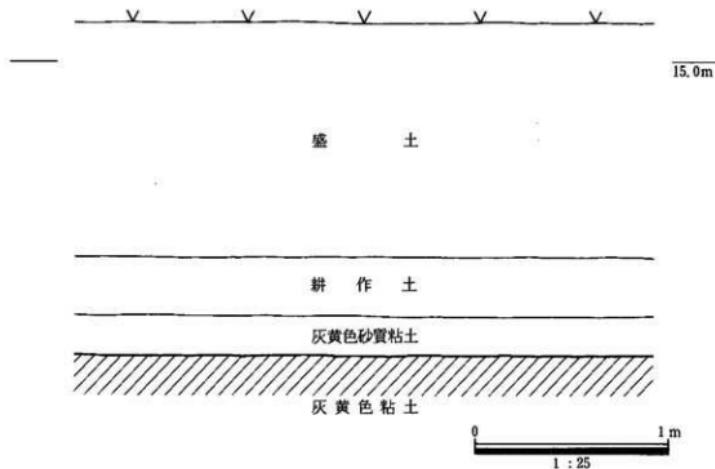


図31. 75-M地区土層模式図

## 10. 島上郡衝跡（11-C・D・G・H・K・L地区）の調査

調査地は高槻市郡家本町544-1に位置し、小字は位前である。今回の調査は老人ホーム跡地にテニスコートを新設するために事前に実施したものである。遺構の分布状況を探るために試掘調査をおこなったところ、敷地の南側にひろがる遺物包含層を検出した。このため調査は4,563m<sup>2</sup>のうち遺構の分布する南側1,500m<sup>2</sup>について実施した。

調査地は全体が厚い盛土で覆われているために、重機で盛土を除去したのち人力で遺構



図32. 11-C・D・G・H・K・L地区調査位置図

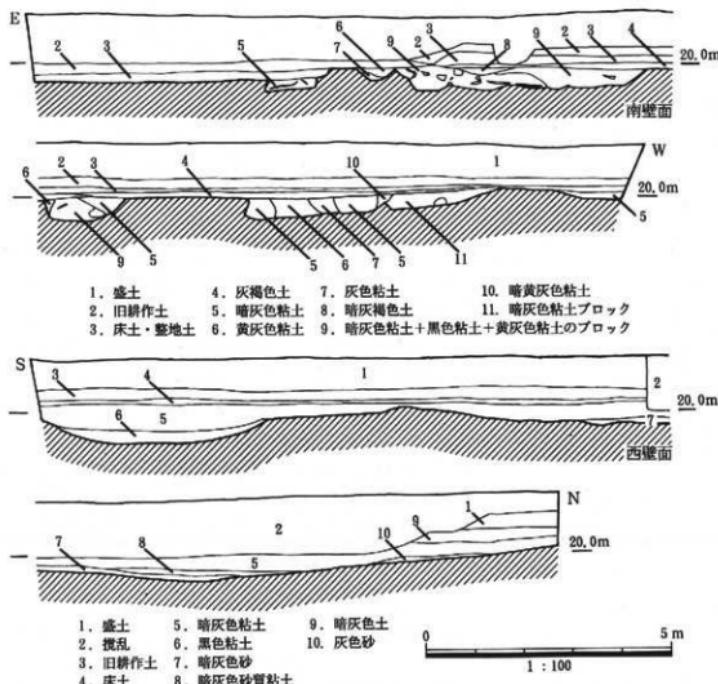


図33. 土層図

検出作業をおこなった。基本的な層序は盛土（0.6～0.7m）、旧耕作土（0.2m）、床土（0.1m）、淡黄灰色粘土〔地山〕である。地山面の標高は21～22mで、北西から南東に向かってゆるやかに傾斜している。

#### 遺構・遺物（図版第34～40、図33～39）

検出した遺構は方墳1基、土塚墓182基である。

方墳は東および北側周濠の一部と南東隅部分の墳丘裾を検出した。墳丘の盛土は削平をうけすでに無いうえ、大半は調査区外にあるために全容は知れないが、検出状況からすれば一辺約18mの方墳と考えられる。周濠は幅3～6m、深さ0.5mをはかる。埋土は上下2層認めら

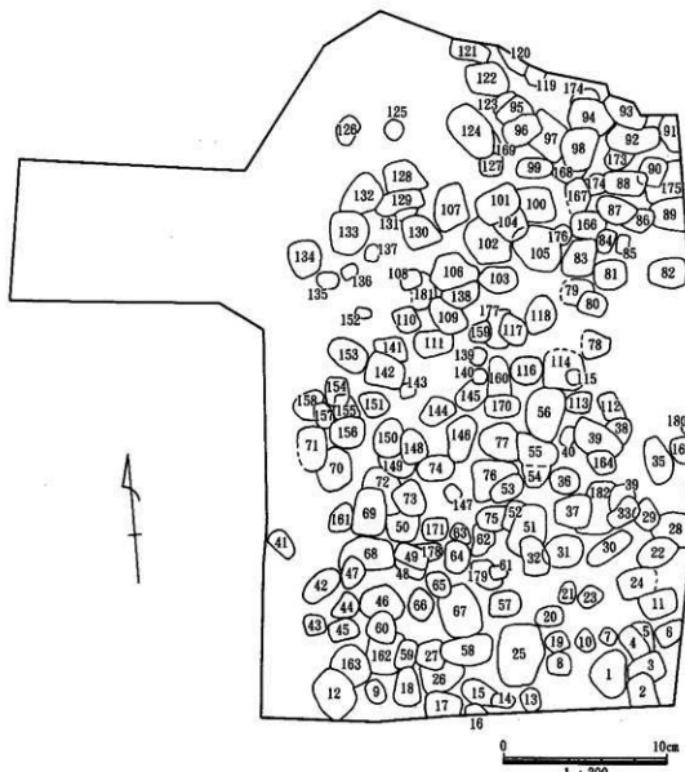


図34. 土塚墓の番号

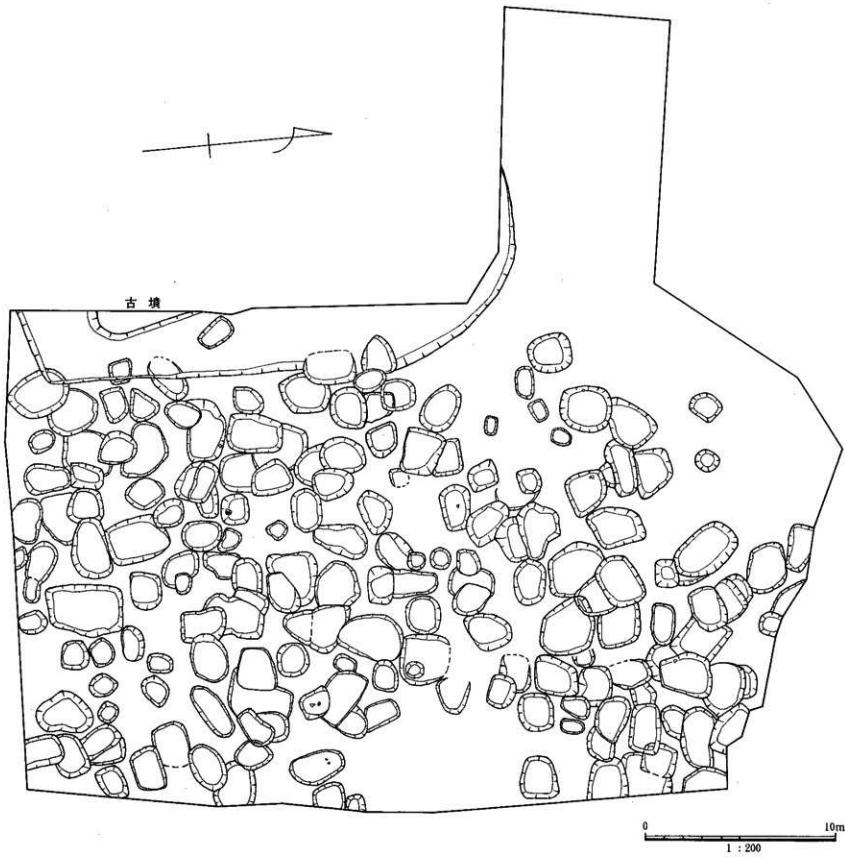


图35. II-C・D・G・H・K・L地区 平面图

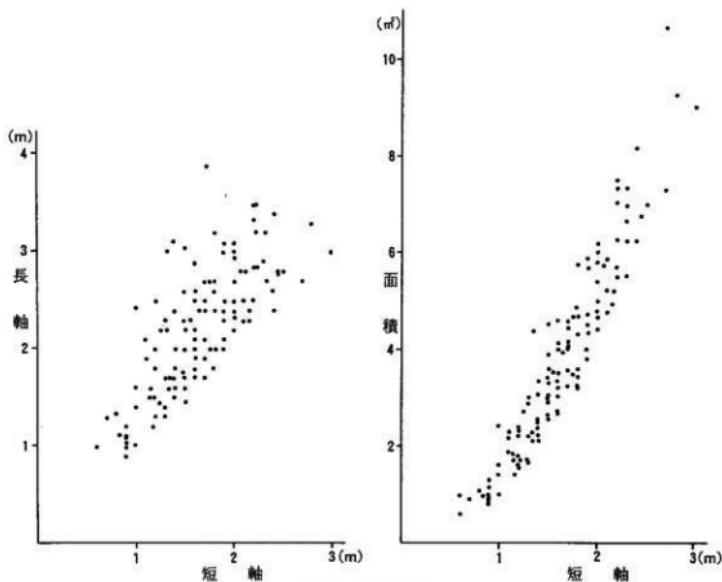


図36. 墓墳の法量

れた。上層は暗灰色粘土で奈良・平安時代の須恵器や瓦器を含み、下層は須恵器・埴輪をふくむ黒色粘土である。

遺物には東側周濠から出土した須恵器：蓋杯（23・24）、高杯（26）、腹（25）、壺や埴輪：円筒（17）、朝顔（18～20）、楯（21・22）などがあるが、いずれも小片であり完形に復原できるものは無かった。

この古墳の東周濠北東部を掘削中にサヌカイト剝片が数点出土したため、周辺部を精査したところ東西2m、南北2.5mの範囲に60点あまりがまとまっていた（27～33）。石材にはサヌカイトのほかチャートなどがある。

土壤墓は西端部を除く調査区全面に密集した状態で合計182基検出し、さらに調査区外へとひろがる。これらの平面形は長方形～小判形をなすものが多く、その長軸は1m前後から3mを越えるものなどさまざまである。すべての墓墳は後世の削平をうけているが、深さは遺存状態のよい北側で約0.5～0.8mである。壁面は墓墳底にむけてゆるやかに掘削するものと、垂直に近く切り立つものがある。底はほぼ平坦である。埋土はおおきくわけて上下2層あり、下層には地山ブロック土が、上層には黒色土・灰白色土などがレンズ状に堆積する。各土壤墓の

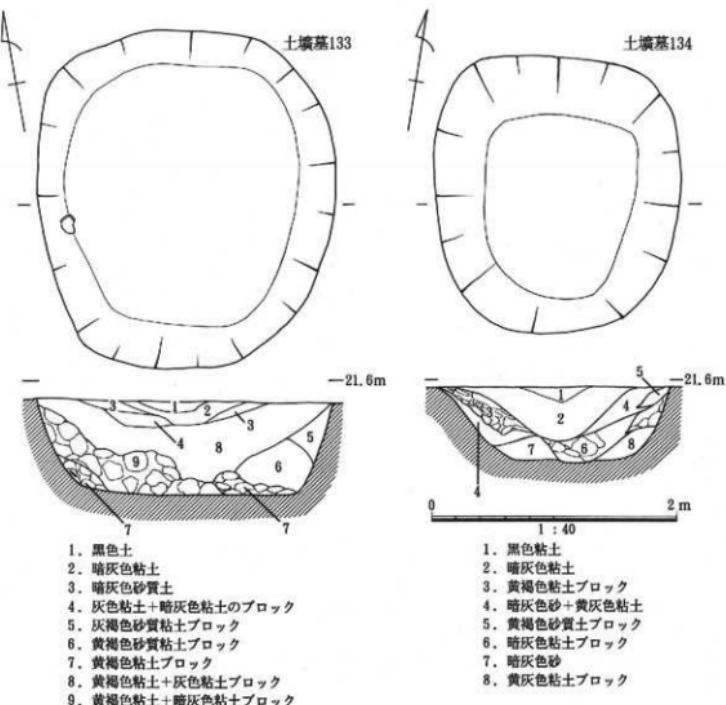


図37. 土壌墓133・134 平面図・断面図

規模は表2・3に示し検出状況のよい2基について概略を述べる。

土壤墓133は調査区北西部、古墳の北東側で検出した。平面形は隅丸方形～長円形を呈し、長軸2.78m、短軸2.44mをはかる。壁面は急角度で掘削され、深さは0.71mである。墓壇は掘削後すぐに埋め戻されたらしく、下半部の埋土はほとんど腐食していないブロック土である。上半部には黒色土が堆積している。底は平坦で、弥生後期末頃の甕が1点出土した。

土壤墓134は土壤墓133の南西で検出した。平面形は長軸2.28m、短軸1.1mの隅丸方形を呈している。壁面は土壤墓133にくらべ、ゆるやかな角度で掘削されている。埋土はやはり下半部がブロック土、上半部が黒色土となり深さは0.58mである。

墓壇から出土した土器はすべて弥生後期後半～末頃の甕（1～7）と壺（8～16）である。壺には広口壺（1・2）、短頸壺（3）、長頸壺（4～7）があるが少數で全形を知るものは



图38. 旧石器出土状况

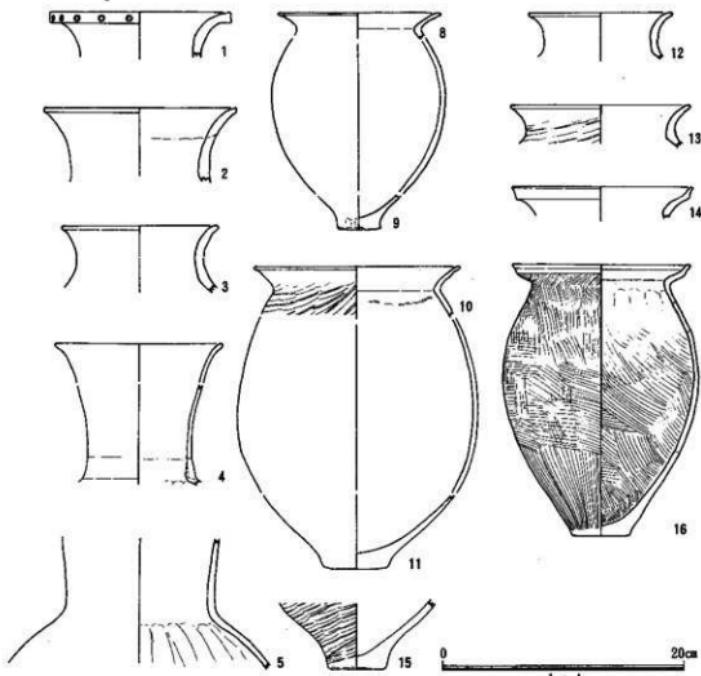


図39. 烏生土器実測図 土壙墓30(8+9) 土壙墓35(12) 土壙墓37(14) 土壙墓44(16)  
土壙墓96(1) 土壙墓98(10+11) 土壙墓107(3) 土壙墓109(2)  
土壙墓133(15) 土壙墓143(13) 土壙墓146(5) 土壙墓160(4)

ない。壺のなかには受口状口縁をもつ近江系（14・16）もある。このうち全形の知れた16は口径15.6cm、器高22cmをはかる。最大腹径は16.4cmと器高のわりには肩が張らず、スリムな形態である。内外面ともにハケ調整を施すが口縁部および肩部に施文はない。

その他の遺物として有舌尖頭器（34）と錢貨（35）がある。34は土壙墓100の埋土より出土した完形品である。全長5.8cm、幅2.1cm、厚さは1.1cmを測り、全体に丁寧な平行剥離が施されている。35は永楽通寶である。暗灰色土（近世～近代整地土）出土。

#### 小 結（図40）

今回の調査では、岬上郡衙跡西縁部においてはじめてまとめた遺構を検出した。

古墳は部分的な検出にとどまったが、東側で平成3年に検出した円墳とあわせ、調査区周辺部になお未発見の古墳が埋没している可能性がたかまってきた。これらの古墳は南西200m

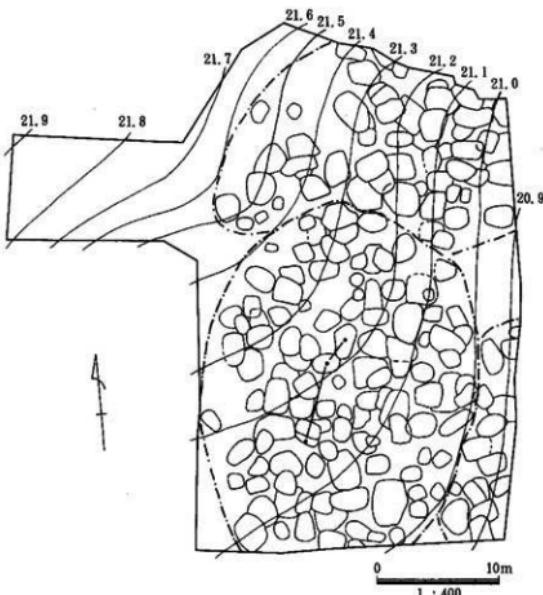


図40. 土壙墓群想定図

に展開する狐塚古墳群と一連のものであると考えられる。

弥生時代の土壙墓群は今回はじめて検出した遺構である。墓壙には長軸1.5m未満とそれ以上のものがあり、うち1.5~2.5mを測るもののが最も多く全体の約6割をしめる。これらの土壙墓の周囲に小規模な土壙墓がともなうようにして数基~十数基がまとまり、一単位を形成している。さらにこのようなまとまりが十数単位ほどあつまってひとつの群をなしているようであり、調査区内で3つの群を想定している。これら的小単位や群は集落内での家族等の単位集団を反映しているといえよう。

これら土壙墓は東~南東に面した緩斜面にひろがり、その西限は標高21.5mライン付近となる。この北側には調査区を西から東へ横切る小尾根があり、以北は沼ないし湿地帯であることからこの尾根の南斜面でおさまる。東は隣接地の調査で数基の土壙を検出し、以東は無遺構となることから、東限のおおよその位置を把握できよう。この南東側50mの地点ではさきの湿地から続く弥生後期の小河川が南流する以外に遺構は無い。このような分布状況からすれば、南側も広範囲に遺構がひろがる状況ではなく、その範囲は東西約50m、南北約60~70m程度と考えられる。

遺物は約半数の墓壙でみとめられた。すべて弥生土器であり、2～3個体が出土した数例以外は1個体分である。しかもその大半は小片のみの出土である。器種は壺が圧倒的に多く、ほかには壺が数点ある。壺には煤の付着したものも少なからずある。埋葬儀礼に関わるのかもしれない。出土した土器のなかには他地域からの搬入品も認められる。このうち土壙墓48・74・146からは同じ個体の破片が出土している。各被葬者の生前の関係を示しているのかもしれない。土器は埋土中位より上、ブロック土上面付近で検出する例が多い。埋葬の最終段階で供獻あるいは投棄されたとかんがえられる。

墓壙は多少の切りあいはあるものの、完全に他の墓壙を切るものはすくない。互いに接するように墓壙がまとまっている状況からすれば、小規模なマウンドや墓標などの存在を示唆するものであろう。墓道については今回あきらかにできなかった。小単位間には遺構の空白地をもつものがあり、これらはその可能性がある。

このような土壙墓群は市内では本例のはかに郡家今城遺跡（庄内期）と狐塚古墳群（古墳時代中期）の2例ある。両例とも矩形を呈した土壙が密集し、単位群を構成するなどそのあたりは共通する。これら3遺跡はいずれも郡家川西の集落の縁辺に位置することから、その墓域であることは明白である。しかしながら、弥生終末期から庄内期にかけて本遺跡から郡家今城遺跡へと墓域が移動したのか、あるいは別個の集団であるのかは周辺地域の調査を待たねばならない。

調査地一帯は岡本山古墳、郡家車塚古墳、前塚古墳、今城塚古墳などの大王墓・首長墓をはじめ狐塚・掛塚などの群集墳や土壙墓群、古代から中・近世にいたる墳墓など各時期の墓が集中し、長期間にわたって墓域を形成している。今回検出した土壙墓群はこの端緒であったといえよう。

(宮崎)

遺構No.	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	遺構No.	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
1	260	240	25	51	320	230	27
2	-	150	18	52	195	-	42
3	240	170	26	53	220	140	40
4	230	130	32	54	-	180	39
5	200	-	21	55	250	200	35
6	180	140	31	56	340	240	25
7	110	90	60	57	190	160	17
8	150	140	33	58	310	190	36
9	150	115	36	59	180	120	51
10	130	120	20	60	190	170	31
11	220	160	18	61	110	90	32
12	300	230	49	62	200	140	20
13	150	120	24	63	120	90	50
14	130	70	23	64	210	160	39
15	200	150	27	65	180	140	44
16	-	100	13	66	170	160	17
17	230	-	19	67	310	200	41
18	250	160	25	68	320	220	31
19	140	130	25	69	300	200	31
20	180	120	37	70	250	220	61
21	140	100	16	71	270	180	50
22	250	170	44	72	290	230	59
23	150	120	40	73	230	130	40
24	250	190	34	74	230	155	50
25	390	270	42	75	-	160	33
26	270	-	20	76	270	230	45
27	180	180	7	77	240	230	24
28	-	220	30	78	180	180	14
29	170	150	23	79	200	175	10
30	310	135	27	80	180	140	15
31	250	200	45	81	200	190	21
32	240	150	45	82	240	200	28
33	210	170	48	83	235	200	20
34	-	160	30	84	160	115	35
35	270	170	35	85	135	80	19
36	180	160	34	86	-	150	15
37	220	200	40	87	240	170	16
38	-	160	32	88	260	160	38
39	300	190	39	89	-	210	30
40	120	90	38	90	190	160	22
41	190	110	22	91	-	-	19
42	260	150	33	92	320	180	31
43	130	120	28	93	280	-	56
44	170	140	23	94	290	200	35
45	170	130	28	95	210	170	18
46	270	200	25	96	240	180	34
47	180	140	22	97	285	220	39
48	210	-	17	98	280	250	57
49	210	110	32	99	220	125	36
50	200	-	53	100	230	-	45

表2 土壙墓一覧(1)

造構No.	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	造構No.	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
1 0 1	2 8 0	2 0 5	5 4	1 5 1	1 7 0	1 6 0	5 7
1 0 2	3 0 0	3 0 0	5 4	1 5 2	1 0 0	6 0	3 6
1 0 3	2 4 0	1 6 5	4 8	1 5 3	2 6 0	1 8 0	1 7
1 0 4	—	2 0 0	3 9	1 5 4	1 8 0	1 8 0	4 0
1 0 5	3 3 0	2 8 0	5 3	1 5 5	1 6 0	1 5 0	4 9
1 0 6	2 8 0	2 1 0	3 7	1 5 6	2 2 0	2 0 0	6 2
1 0 7	2 5 0	2 2 0	3 9	1 5 7	1 7 0	1 1 0	3 4
1 0 8	1 3 0	1 2 0	3 9	1 5 8	2 0 0	1 8 0	3 9
1 0 9	2 7 0	1 7 5	6 8	1 5 9	1 3 0	1 3 0	1 7
1 1 0	1 6 0	1 4 0	8 0	1 6 0	—	1 4 0	2 1
1 1 1	2 4 0	1 7 0	6 4	1 6 1	1 7 0	1 4 0	3 5
1 1 2	2 0 0	1 2 0	2 5	1 6 2	2 7 0	2 0 0	5 4
1 1 3	1 6 0	1 4 0	1 1	1 6 3	2 6 0	—	6 9
1 1 4	2 7 0	2 7 0	3 7	1 6 4	1 7 0	1 5 0	3 5
1 1 5	1 0 5	9 0	3 1	1 6 5	—	1 7 0	3 8
1 1 6	2 0 0	1 8 0	2 0	1 6 6	2 1 0	1 9 0	1 7
1 1 7	1 7 5	1 5 0	2 4	1 6 7	2 2 0	1 5 0	3 0
1 1 8	2 2 0	2 0 0	1 6	1 6 8	—	—	1 2
1 1 9	—	1 2 0	4 6	1 6 9	—	—	1 9
1 2 0	—	—	7	1 7 0	2 2 0	1 3 0	1 9
1 2 1	2 4 2	1 0 0	5 8	1 7 1	1 7 0	1 3 5	4 8
1 2 2	2 5 0	2 1 0	1 8	1 7 2	1 8 0	—	2 8
1 2 3	—	1 6 5	3 9	1 7 3	—	1 5 5	2 9
1 2 4	3 3 5	2 2 0	7 4	1 7 4	—	1 2 0	3 1
1 2 5	1 2 0	1 1 7	3 8	1 7 5	—	—	2 2
1 2 6	1 5 8	1 3 5	1 7	1 7 6	—	1 2 0	3 6
1 2 7	1 4 4	1 2 2	7 3	1 7 7	2 4 5	1 5 0	2 3
1 2 8	2 5 0	2 0 0	4 4	1 7 8	—	1 1 0	1 0
1 2 9	3 0 5	1 5 0	6 5	1 7 9	2 0 0	1 5 0	2 4
1 3 0	2 3 0	2 1 5	3 6	1 8 0	—	1 0 0	3 0
1 3 1	—	—	4 7	1 8 1	2 3 0	1 5 0	8
1 3 2	2 4 0	2 1 6	4 9	1 8 2	3 5 0	2 2 0	3 4
1 3 3	2 7 8	2 4 4	7 1				
1 3 4	2 2 8	2 1 0	5 8				
1 3 5	1 6 0	1 0 0	2 6				
1 3 6	1 1 2	8 5	2 3				
1 3 7	1 1 2	8 5	3 5				
1 3 8	2 2 0	—	4 7				
1 3 9	1 0 0	1 0 0	1 7				
1 4 0	1 0 0	9 0	3 1				
1 4 1	2 0 0	1 6 0	5 0				
1 4 2	2 4 0	1 9 0	4 1				
1 4 3	1 0 0	1 0 0	2 3				
1 4 4	2 2 0	1 6 0	2 7				
1 4 5	2 2 0	1 5 0	2 9				
1 4 6	2 9 0	1 6 0	4 5				
1 4 7	9 0	9 0	1 2				
1 4 8	2 0 0	1 5 0	4 6				
1 4 9	—	—	2 7				
1 5 0	2 3 0	1 9 0	5 5				

表 3 土 壤 墓 一 覧 (2)

### III 郡家今城遺跡

#### 11. 郡家今城遺跡の調査



図41. 郡家今城遺跡調査位置図

郡家今城遺跡は、1969年の発見以来調査を重ね、奈良・平安時代に営まれた集落の様子が次第に明らかになってきている。そしてその集落は、嶋上郡衙との密接な関係が指摘され、郡衙の官人層の集落との見方が有力である。

今回の調査地は、高槻市水室町一丁目777-2・3にあたり、小字名は下河原である。個人住宅建設工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

当該地は、遺構の中心部とみられる府立三島高校の西側に位置し、この北側では1989年および1993年に調査され、律令期の山陽道跡や掘立柱建物、井戸などが検出されている（「郡家今城遺跡（89-2）の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・14』1990年、および『郡家今城遺跡（93-3）の調査』『嶋上遺跡群18』1994年）。今回の調査でもこれらに連なる遺構の検出が予想された。

基本的な層序は、耕作土・床土（0.15～0.1m）、客土（0.1～0.05m）、暗灰色粘質土【包含層、南半部のみ】（0.1m）、黄灰色粘土【地山】となり、地山面の標高はおよそ19.3mで、やや南側に傾斜している。遺構はすべて、地山である黄灰色粘土上面で検出した。

##### 遺構（図版第41、図42）

検出した遺構は掘立柱建物2棟、溝、土坑などである。

掘立柱建物1は、調査区の東南隅で検出したが、南北に連なる柱穴を2個確認したのみで他の調査区外となり、建物の棟方向など詳細は不明である。しかし、北側の柱穴では柱痕跡（直径0.15～0.1m）を確認しており、柱間は2.1m、主軸方位はN-5°-E（方位は磁北を使用、以下も同様）と想定できる。柱穴は一辺0.8mの方形で、深さ0.6mを測り、北側の柱穴は溝4を切っている。

掘立柱建物2は掘立柱建物1に重なる位置で検出した。その大半は調査区外となり、建物の北西隅の3間分を確認した。柱間は2.2～1.9mと一定しない。主軸方位はN-8°-Eを示す。柱穴は一辺0.4～0.3mの方形、ないしは隅丸方形で、深さは0.4～0.3m、溝との切り合いで、いずれも溝を切っている。

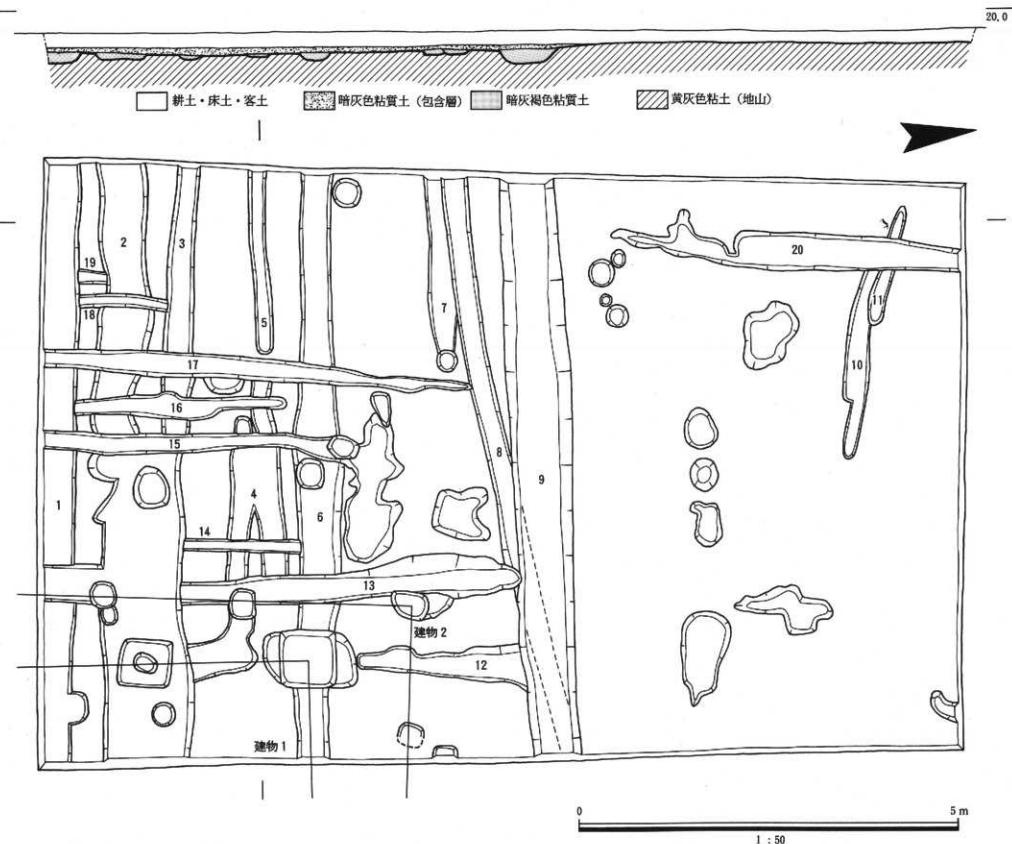


图42. 郑家今城道路平面图·土层图

溝は、調査区の南半部では縦横に交差している状況がみられ、北半部では一転して希薄である。東西溝11条、南北溝9条を検出しており、南北溝が東西溝を切っていて、両者に若干の時期差が認められる。東西溝は、ほとんどが幅0.6m未溝、深さ0.1mの細く浅い溝である。平行する溝が合流して検出され、みかけ上幅が広く見えるもの（溝2・3）や、途中で途切れるものの（溝5）などがみられるが、おおむね共通する形態を持つ溝と考えられよう。埋土は暗灰褐色粘質土である。ところが、溝9はこれらとは様相が異なり、幅0.8m、深さ0.2mの断面が台形の溝である。溝8に切られている。埋土は暗灰褐色粘質土で、そのほかの溝との質的な区別はできなかったが、その形態の違いは明白で、異なる性格を持つ溝と考えられる。

南北溝は、いずれも幅0.4m未溝、深さ0.1mの小規模な溝である。埋土は暗灰褐色粘質土で東西溝との質的な差はほとんどない。

#### 遺物（図版第42）

今回の調査では、奈良・平安時代の土器が出土しているが、細片がほとんどで、整理箱にして3箱足らずと少ない。おもなものを報告する。

1～14は溝9から出土した製塙土器である。1・4・6は口縁部端部をまるくおさめるもの、2・3・7は口縁端部がやや薄い。12・13は底部である。いずれも内面はナデている。1・5は淡褐色、4は赤灰色、6は淡灰褐色、7は暗褐色、10は淡灰色、11は暗灰色、2・3・8・9・12・13・14は明褐色を呈する。

17・18・20は溝9から出土した。17は土器器の甕で、内面はナデ、外面はハケで仕上げる。内面は淡褐色、外面は黒褐色を呈する。18は須恵器の蓋で、裏面にはかえりがつく。灰白色である。20は須恵器杯で、口縁部は欠損する。淡灰色である。

16は掘立柱建物1の北側の柱穴から出土した土器器甕である。口縁内面にハケメが残り、体部内面上半はナデで仕上げる。体部外面には粗いハケがみられる。褐色である。

15・19は包含層から出土した。15は須恵器蓋で、裏面にかえりがつく。灰白色である。19は外面に粗いタタキがのこり、内面はナデで仕上げる。器形は不明。12世紀頃の東播磨産であろう。淡褐色である。

#### 小結（図43）

今回の調査では2棟の掘立柱建物の他に、縦横に走る小規模な溝を検出した。こうした溝は、過去の調査でも確認されていた。しかし、その密集度においては今回検出した溝9から南の状況はけた連いで、溝9を境として土地の利用状況が異なっていたとみられる。溝9は前述したことく、幅・深さ・形態が他の溝とは異質であり、こうした状況を考えあわせると溝9は、土地を区画する溝であったとみることができる。

一方、小規模な溝は掘立柱建物の柱穴に切られており、これらよりも先行する。掘立柱建物



図43. 那家今城遺跡遺構概念図

は調査区の関係上一部のみの確認にとどまったが、建物方位を復原し、過去の調査成果を引用すれば、9世紀前半頃の年代が推定できる。小規模な溝はこれ以前であるから、およそ8世紀後半から末頃と考えられよう。ところで、溝9もこれらと同質の埋土を持つことから、ある一定の時間幅は認めつつもほぼ同時期とする事が可能であろう。この時期、すでに溝9の北側では掘立柱建物が存在し宅地として機能していたことは、これまでの調査で判明している。とすれば、溝9はこうした宅地の南限を画する溝であったといえる。

では、溝9によって宅地と分断された地域、つまり小規模な溝が密集して存在する一帯はどういう土地利用がされたのだろう。その点については、現段階では確定する材料がないが、宅地とは全く性格の異なった空間、たとえば畠などの生産活動の場を想定することも可能と思われる。

(高橋)

## IV 高槻城跡

### 12. 高槻城跡の調査



図44. 高槻城跡調査位置図

高槻市出丸町964-28にあたり、小字名は南出丸と称する。現状は宅地である。

このたび、個人住宅の新築工事が計画されたため事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は本遺跡の西側に位置し、外堀にあたる部分である。

調査地はすでに宅地化されているので調査区内に3m×3mのトレンチを設けて、層序の観察と造構の確認をおこなった。層序は盛土(1m)、耕作土(0.2m)で、それ以下は暗青灰色の粘土層が分厚く堆積していた(図45)。

今回の調査地は、出丸に近い位置にあたり、城内からの投棄による遺物包含層の検出が予測されたが、今回は残念ながら検出できなかった。また、明治7年の廃城時に堀底がどれほど埋まっていたかについては、今回の断面観察からは確認できなかった。

(木曾)

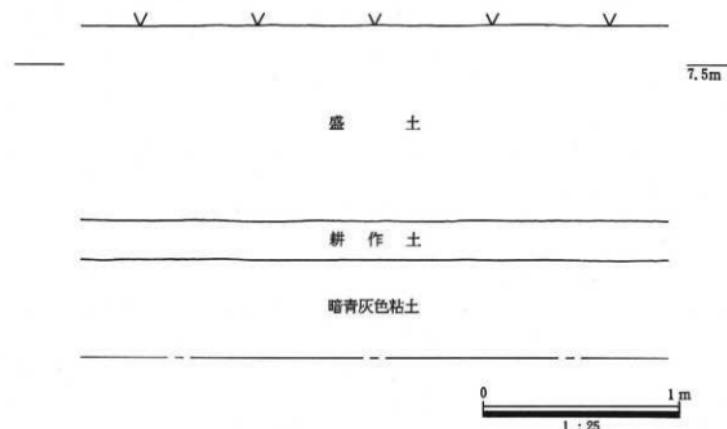


図45. 高槻城跡土層模式図

## V 天川遺跡

### 13. 天川遺跡 (94-1) の調査

天川遺跡は、市域の南東辺に位置し、桧尾川西岸に展開する中世の集落遺跡である。その詳細はながく不明であったが、平成2年におこなわれた調査では、12世紀から14世紀中頃とみられる建物、井戸などの遺構が検出されており、遺跡の一端が明らかになった。

今回、平成2年の調査区の西北約50mの地点で個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に調査を実施した。

調査地は高槻市須賀町282-5にあたり小字名は札ノ内である。調査は長さ8.2m、幅3mの調査区を設けておこなった。

基本的な層序は盛土(1.5m)、耕作土(0.2m)、床土(0.1m)、茶灰色粘土〔遺物包含層〕(0.7m)、暗青灰色シルトとなり、茶灰色粘土層には部分的に流路とみられる灰色砂がみられる(図47)。



図46. 天川遺跡 (94-1+2) 調査位置図

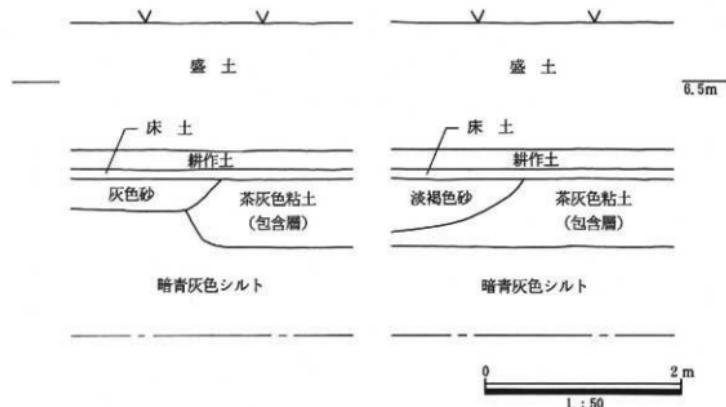


図47. 天川遺跡土層模式図  
左: 94-1 調査区 右: 94-2 調査区

遺構は検出できなかったが、茶灰色粘土からは、土師器・瓦器などの細片が出土している。

(高橋)

#### 14. 天川遺跡（94-2）の調査

調査地は高槻市須賀町282-6にあたり、小字名は札ノ内である。個人住宅の新築工事にさきだって調査を実施した。

調査は長さ6m、幅3mの調査区を設けておこなった。基本的な層序は94-1調査と同様で、盛土（1.5m）、耕作土（0.2m）、床土（0.1m）、茶灰色粘土〔遺物包含層〕（0.7m）、暗青灰色シルトとなり、茶灰色粘土層には流路とみられる淡褐色砂がみられる（図47）。土師器・瓦器などが出土したが、遺構は検出できなかった。

今回の天川遺跡における2件の調査では、遺構を検出することができなかったが、中世の集落の広がりについて、一定の方向を示すものといえる。つまり、この付近が集落の北限と考えられ、集落の中心はここよりも南部にあると予想される。今後の周辺での調査に期待したい。

(高橋)

## VI 芥川山城跡

### 15. 芥川山城跡の調査

芥川山城跡は平成5年度に主郭部の発掘調査を実施したところ、弘治2年（1556）の火災を裏付ける焼土層や礎石建物が検出された。出土した遺物には16世紀末から17世紀初期に位置付けられるものがあり、從来かんがえられてきた廢城期以降にも使用されていた可能性が指摘できた。また、同時に実施した遺構概要図の作成では、ほぼ全体が山林におおわれ、近畿地方のなかでも良好に遺構が残る戦国時代の山城跡であると確認できた。

今年度は、郭①から南側にのびる尾根において伐採・整地工事が計画されたため事前に発掘調査を実施した。調査地は高槻市大字原4,030番地である。

遺構（図版第43～46a、図49～51）

調査地の尾根には郭①と堀切Jが存在する。このため、郭①に幅約1.5mのトレンチを設定したところ溝や土壌が検出されたため、トレンチを順次拡張しながら調査を実施した。堀切J付近は狭い尾根であり、堀切の東端とみられる部分に3m×12mのトレンチを設定した。堀切Jの南側尾根では遺構は知られていないが、約40m南側に3m×5mのトレンチを設定して調査を実施した。これらのトレンチをA区・B区・C区とする。

#### A 区

平坦な郭①の中央部にトレンチを設定したところ、表土・黄灰色土を除去すると無遺物・岩盤状の黄白色土の地山となる。地山面は郭①の中央部から北側は平坦で、中央部から南側にかけて下降している。トレンチ西壁の断面を観察すると、北端では表土（0.1m）・黄灰色土

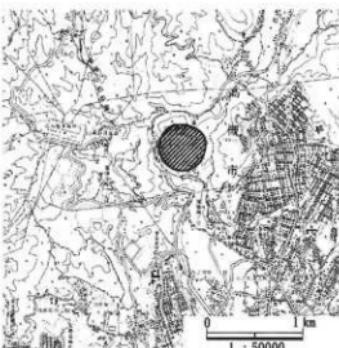


図48. 芥川山城跡位置図



図49. 芥川山城跡調査位置図

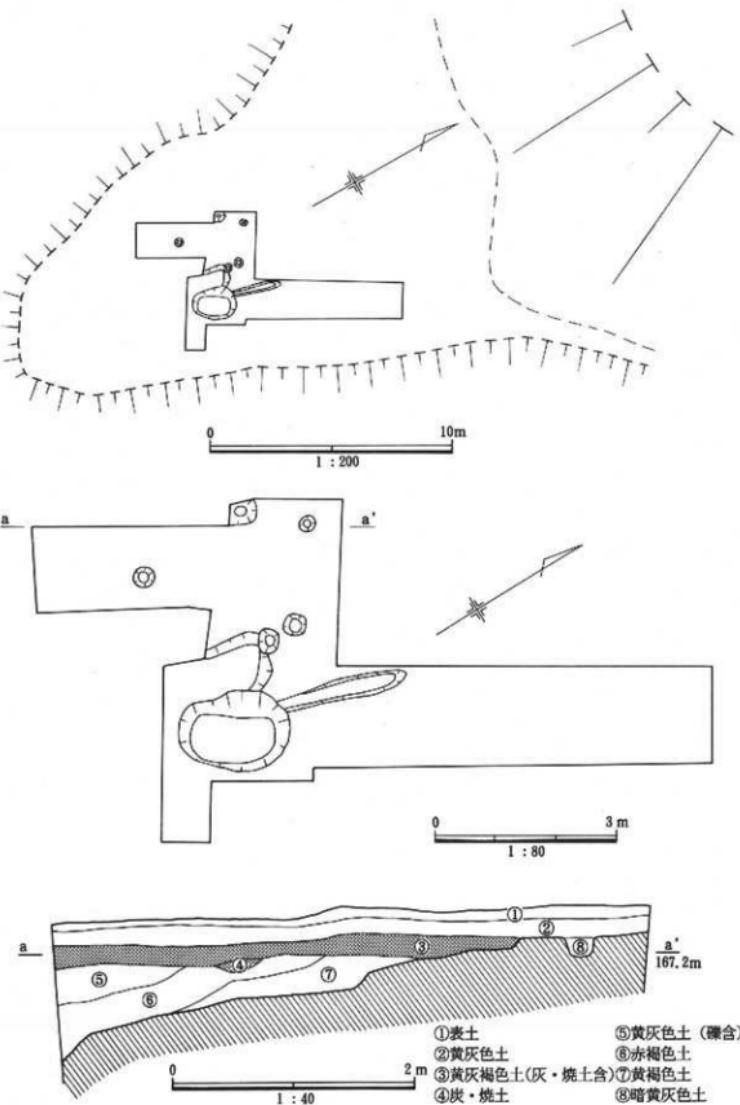
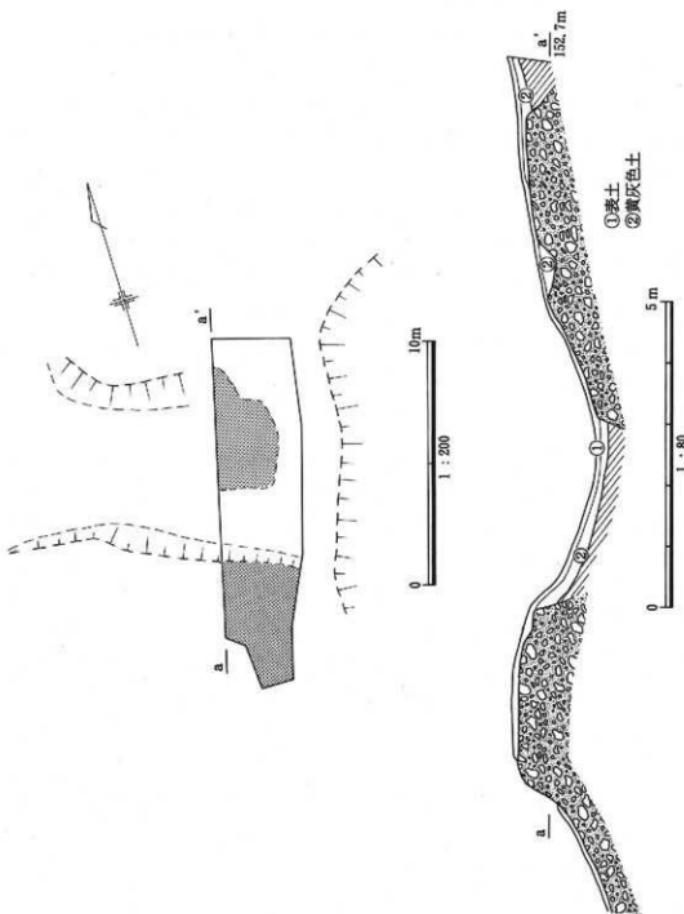


图50. A区平面图・断面图

図5. B区平面図・断面図



(0.15m) のすぐ下が地山となり、南側では炭・焼土を多量に含む黄灰褐色土(0.2m)がみられる。その下は礫を多量に含む黄灰色土(0.3m)・赤褐色土(0.15~0.4m)・黄褐色土(0.1~0.3m)がレンズ状に堆積し、トレンチ南端で地山面は急激に下降している。この地山面の下降は郭①が造成された尾根本來の傾斜を示すもので、郭①の造成工事に際して、周囲の山腹を削った土で傾斜面に盛り土したものが黄灰褐色土と地山に挟まれた赤褐色土などの土層

とみられる。また、黄灰褐色土はほぼ同じ厚さで郭①南側を覆い、弘治2年の火災後に実施された整地によるものとみられる。

遺構は地山面が南側に下降をはじめる付近で土壤・柱穴・溝が検出された。土壤・柱穴は黄灰褐色土や炭・焼土におおわれているため、火災の整地以前に存在したものとみられ、もっとも南側の柱穴は下降した地山面で検出されている。

土壤1は地山面を掘削した長さ2m・幅1.3m・深さ0.5mの隅丸方形で底部は平坦である。この土壤1に流れ込むように幅0.3m・深さ約0.1mの溝1が直線的に掘削されていた。柱穴はトレンチ西側で4個検出された。建物や柵としてのまとまりはみられないが、直径0.3~0.4m、深さ0.1~0.3mでしっかりと掘削されている。

遺物は遺構からまったく出土せず、わずかに表土や黄灰色土の除去作業中に土師器皿などの破片が採集されただけである。

#### B 区

南側にのびる尾根の狭くなった部分で、A区と約15mの比高差がある。堀切Jの東端は崖面となっているが、地表面の観察では幅約7mを測った。トレンチは堀切の東端に設定し、堀切内部では表土(0.1m)・黄灰色土(0.15m)と堆積し、地山は硬質の黄白色土である。やや平坦となった尾根を東側の崖面にむけて、幅約7m、深さ約0.8m掘削し堀切としている。また、トレンチ南端では堀切南側が約3mの幅で土壌基部のように削り出されたように観察できた。また、堀切両側では表土を除去するとすぐに岩盤や岩肌が露出する。南側では岩盤を部分的に掘削したことが観察され、肩部を確認することができるが、北側の肩部は不明瞭である。これは表土を除去するとすぐに岩肌が露出するため、掘削が不十分であったためとみられる。遺物は表土から少量の土師器破片が出土している。

#### C 区

表土(0.1m)・黄灰色土(0.2m)・黄色土(0.2m)と堆積し、地山は岩盤状の黄褐色土である。遺構はまったく検出できなかったが、黄灰色土・黄色土から土師器皿・中国製染付・丹波焼の破片が出土した。

##### 遺 物（図版第46b）

今回の調査では遺物は少量しか出土せず、器形や特徴の判るものは図版にまとめた程度である。土師器は口径10cm程度に復元できる皿が出土しているが、A区から出土したものには砂粒を含み胎土が粗く褐色のもの（1）がある。おもにC区から出土したものは胎土が精良で黄灰色である（2~4）。A区から出土した備前焼の鉢（5）は、内面の条線が底部から斜め方向にのびていることが確認できるだけである。C区からは内面に4本の条線を1本づつ施した丹波焼鉢（6）が出土している。中国製陶磁器はA区から菖蒲底の染付皿と染付碗の小破片（7

～9）が、C区から端反の白磁皿と基筒底の染付皿（10・11）が出土している。染付皿の底部付近にはいずれも簡略化された芭蕉葉文がみられる。また、C区から銅錢が1点出土しているが、錢貨名は鋸び取りが不十分なため不明である。

### 小 結

前年度にひきつづき、今年度の調査でも郭①に設定したA区において火災後の整地層を確認することができた。A区から出土した遺物は少量であり、遺物の検討から整地層の年代を特定するのは難しいが、『多聞院日記』にある弘治2年（1556）の火災記録に比定するのがもっとも適当とみられ、郭①以外にも火災の及んだことが判る。この整地層の下部から検出された盛土から火災以前に郭①が造成されていたことが判る。しかし、その造営時期は出土遺物がまったく無く不明である。

B区ではやや平坦となった尾根を切断して堀切Jを設けているが、出土遺物が少なくこれも造成時期は不明である。C区では遺構は確認できなかったが、中国製染付や丹波焼の破片が出土し、明瞭な遺構として残らないが南側の尾根筋も防衛に利用されていたことが判る。また、大阪城跡の調査などを参考にすると丹波焼の鉢は豊臣前期になって出土する傾向にある。前年度の郭①の調査でも唐津焼の破片が出土しており、従來說かれてきた魔城期よりも新しい時期まで芥川山城が使用されていたことは確実である。

（橋本）

## VII まとめ

今年度は郡家車塚古墳1件、嶋上郡衙跡9件、郡家今城遺跡1件、高槻城跡1件、天川遺跡2件、芥川山城跡1件の合計15件の発掘調査を実施した。

郡家車塚古墳の調査では、2基の埋葬施設を確認したのをはじめとして、大きな成果が得られた。後円部中央に位置する第一主体部は粘土郷で、全長8.0~7.5mと推定される。これの東側にはやはり粘土郷とみられる第2主体部が存在する。この第2主体部は長さなどは不明だが、第一主体部の構築以後に造られていることが判明している。両埋葬施設の時間幅や埋葬された人物の関係など、今後に期すべき課題は多いが、その端緒となる今回の調査成果は古墳解明の貴重な資料といえる。

また、昨年に引き続き古墳各部の法量など基礎的なデータを得るとともに、葺石の作業工程や、埴輪の設置手法などが確認され、4世紀末の前方後円墳の様相がほぼ明らかになった。今後は、埴輪を含めた、同時期の前方後円墳との詳細な比較検討が必要と考える。

嶋上郡衙跡では、西辺域の調査で郡衙成立以前の様相が明らかとなった。11-C・D・G・H・K・L地区（以下11-C～L地区と表記）では、弥生時代の土壙墓群を初めて検出した。土壙墓は182基を確認しており、その配置などから數基ないしは十数基がまとまって一単位を形成し、さらに十数単位がまとまって一つの群をなしているとみられる。こうした状況は、当時の集落を構成した単位集団を復原するうえで、重要な資料となろう。また、類似する土壙墓が郡家今城遺跡（庄内期）や狐塚古墳群（古墳時代中期）で確認されている。今後、こうした資料が蓄積されれば、土壙墓を形成した集落の消長あるいは変容過程を明らかにしていくことも可能となろう。

今城塚古墳の東200mに位置する42-A地区では、墳丘が削平され周溝のみが残る方墳2基および円墳1基が新たに検出された。今後は掛塚古墳群として扱っていくこれらの古墳は、もっとも大きな3号墳で直径15mと小規模であるが、埴輪が豊富に出土し、在地の主長墓とみられる。今城塚古墳の北東側には方墳4基と土壙墓群を伴う狐塚古墳群が知られており、11-C～L地区でもこれと一連の方墳を検出している。今回の掛塚古墳の発見により、5世紀中頃から6世紀初にかけてこの一帯は小規模古墳が濃密に分布することが判明した。そして、興味深いのはこれら小規模古墳と西側の今城塚古墳との関係である。6世紀前半に突如造られた巨大な今城塚古墳は眞の繼体陵とされており、小規模な在地の主長墓とは規模も様相も全くかけた違いである。大王陵の選地にあたっては在地権力層との密接な関係を抜きには理解し難いといえ、掛塚古墳群は三島地方と繼体大王とのつながりを新たな側面から考える貴重な資料といえよう。

郡家今城遺跡は岬上郡衙と密接な関係が指摘され、官人層の集落との見方が有力である。遺跡発見以来調査を重ね、集落の様相が次第に明らかになってきている。とくに、西辺部の女瀬川沿いは近年急速に調査が進展し、宅地利用の状況が把握できる地域であり、今年度の調査でも宅地の南を画する溝9を検出している。この溝9は8世紀後半から末頃と考えられ、溝9の南には小規模な溝が縦横に走っている。こうした溝がどのような性格を持つかは判然としないが、溝9によって宅地と整然と分けられているところから、宅地とは全く異なった土地利用がなされていたとみられる。一方、これらの溝を切って掘立柱建物が検出されている。これまでの調査で北側の宅地が9世紀前半には次第に東あるいは南に移動するように拡大していくことが判明しており、この地区が新たに宅地に転用されたとみられ、さらに南側に宅地が展開することが予想される。宅地の拡大や移動などの土地利用の変遷は、集落の榮枯盛衰を端的に表すものと考えられ、今後はこうした視点がますます重要になると考えられる。

高槻城跡と天川遺跡では、明確な遺構を検出することはできなかった。しかし、こうした小規模な調査を積み重ねることによって、遺跡の実体に迫る調査へとつながるものであり、こうした成果も非常に重要なものといえよう。

芥川山城跡では、郭①の整地層に炭・焼土がみられ、火災のち郭が再び整えられた状況が判明した。この火災は昨年度の調査時に郭①で焼土が検出された弘治2（1556）年のものに比定でき、火災が城の広範囲にわたったことが推測される。また堀切Jの南側尾根では、豊臣前期とみられる中国製染付や丹波焼の破片が出土している。従来、芥川山城の廃城は元亀4（1573）年頃といわれてきたが、それよりも長期間にわたり城が存続していたことが確実となった。この点は城郭史における芥川山城の存続期間の問題のみならず、戦国末期の高槻の支配体制を考えるうえで、新たな視点をあたえるものと思われる。

以上、今年度おこなった発掘調査成果を簡単にまとめた。新たに得られたこれらの成果を地域史研究において有機的に反映できるよう、今後もつとめたいと考えている。 （高橋）



## 抄 錄

フリガナ	シマガミイセキグン
書名	鷲上遺跡群
副書名	
巻次	19
シリーズ名	高槻市文化財調査概要
シリーズ番号	21
編集者名	橋本久和 宮崎康雄 高橋公一 木曾 広 中村剛彰
編集機関	高槻市立埋蔵文化財調査センター
所在地	大阪府高槻市南平台五丁目21-1
発行年月日	1995年3月

フリガナ 所収遺跡名	シマガミイセキ 郡家車塚古墳				
フリガナ 所在地	シマガミイセキ 大阪府高槻市鷲本町34-2				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号 27207 34	34° 51' 05"	135° 35' 50"	19941025 ~ 19950228	207.2 m <sup>2</sup>	雜木林 整備工事
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
郡家車塚 古墳	古墳時代	葺石・埴輪列 粘土櫛	埴輪・土師器	第2主体部確認	

フリガナ 所収遺跡名	シマガミイセキ 鷲上郡衙				
フリガナ 所在地	シマガミイセキ 大阪府高槻市清福寺町B20-1				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号 27207 39	34° 51' 00"	135° 36' 30"	19940427	3.6 m <sup>2</sup>	個人住宅 建設工事
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
鷲上郡衙 官衙	奈良・平安				

フリガナ 所収遺跡名	シマガミイセキ 鷲上郡衙				
フリガナ 所在地	シマガミイセキ 大阪府高槻市郡家新町494-3				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号 27207 39	34° 50' 53"	135° 35' 02"	19940630 ~ 19940721	154.0 m <sup>2</sup>	個人住宅 建設工事
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
鷲上郡衙 官衙	奈良・平安	古墳3基・溝・土器棺	形象埴輪・円筒埴輪・須恵器・土師器		

フリガナ 所収遺跡名	河原辺 島上郡街				
フリガナ 所 在 地	村井アカツキシカニシヨウ 大阪府高槻市川西町一丁目926-7				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 52"	135° 36' 32"	19940513	3.0 m <sup>2</sup>	個人住宅 建設工事
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
島上郡街 官衙	奈良・平安				

フリガナ 所収遺跡名	河原辺 島上郡街				
フリガナ 所 在 地	村井アカツキシカニシヨウ 大阪府高槻市川西町一丁目1088-8				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 43"	135° 36' 24"	19940517	3.0 m <sup>2</sup>	個人住宅 建設工事
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
島上郡街 官衙	奈良・平安				

フリガナ 所収遺跡名	河原辺 島上郡街				
フリガナ 所 在 地	村井アカツキシカニシヨウ 大阪府高槻市川西町一丁目1088-11				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 43"	135° 36' 24"	19940729	6.0 m <sup>2</sup>	個人住宅 建設工事
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
島上郡街 官衙	奈良・平安				

フリガナ 所収遺跡名	河原辺 島上郡街				
フリガナ 所 在 地	村井アカツキシカニシマチ 大阪府高槻市郡家新町156-35				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 42"	135° 36' 14"	19941104 ～ 19941105	6.0 m <sup>2</sup>	個人住宅 建設工事
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
島上郡街 官衙	奈良・平安				

フリガナ 所収遺跡名	シモミツガ 島上郡衙				
フリガナ 所 在 地	村井アカサキシムシマチ 大阪府高槻市郡家新町163-47				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 42"	135° 36' 14"	19941025 ~ 19941026	6.0 m <sup>2</sup>	個人住宅 建設工事
27207 39					
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
島上郡衙 官衙	奈良・平安				

フリガナ 所収遺跡名	シモミツガ 島上郡衙				
フリガナ 所 在 地	村井アカサキシムシマチ 大阪府高槻市郡家新町163-13				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 42"	135° 36' 14"	19940912 ~ 19940914	3.9 m <sup>2</sup>	個人住宅 建設工事
27207 39					
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
島上郡衙 官衙	奈良・平安				

フリガナ 所収遺跡名	シモミツガ 島上郡衙				
フリガナ 所 在 地	村井アカサキシムシマチ 大阪府高槻市郡家本町544-1				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 51' 03"	135° 36' 00"	19940418 ~ 19940617	1,200.0 m <sup>2</sup>	テニスコート 新設工事
27207 39					
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
島上郡衙 官衙	奈良・平安	土壙墓182基 古墳1基	旧石器・弥生土器・ 須恵器・土師器・埴輪		

フリガナ 所収遺跡名	シモミツガ 郡家今城				
フリガナ 所 在 地	村井アカサキシムシマチ 大阪府高槻市水室町一丁目777-2・777-3				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 36"	135° 35' 55"	19940420 ~ 19940506	90.0 m <sup>2</sup>	個人住宅 建設工事
27207 42					
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
郡家今城 集落	奈良・平安	掘立柱建物2棟・溝	土師器・須恵器・製塩 土器		

フリガナ 所収遺跡名	高槻城				
フリガナ 所 在 地	大阪府高槻市出丸町964-28				
コ ー ド	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 23"	135° 37' 17"	19940830	9.0 m <sup>2</sup>	個人住宅建設工事
27207 85					
所収遺跡名	種別	時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
高槻城	城跡	中世・近世			

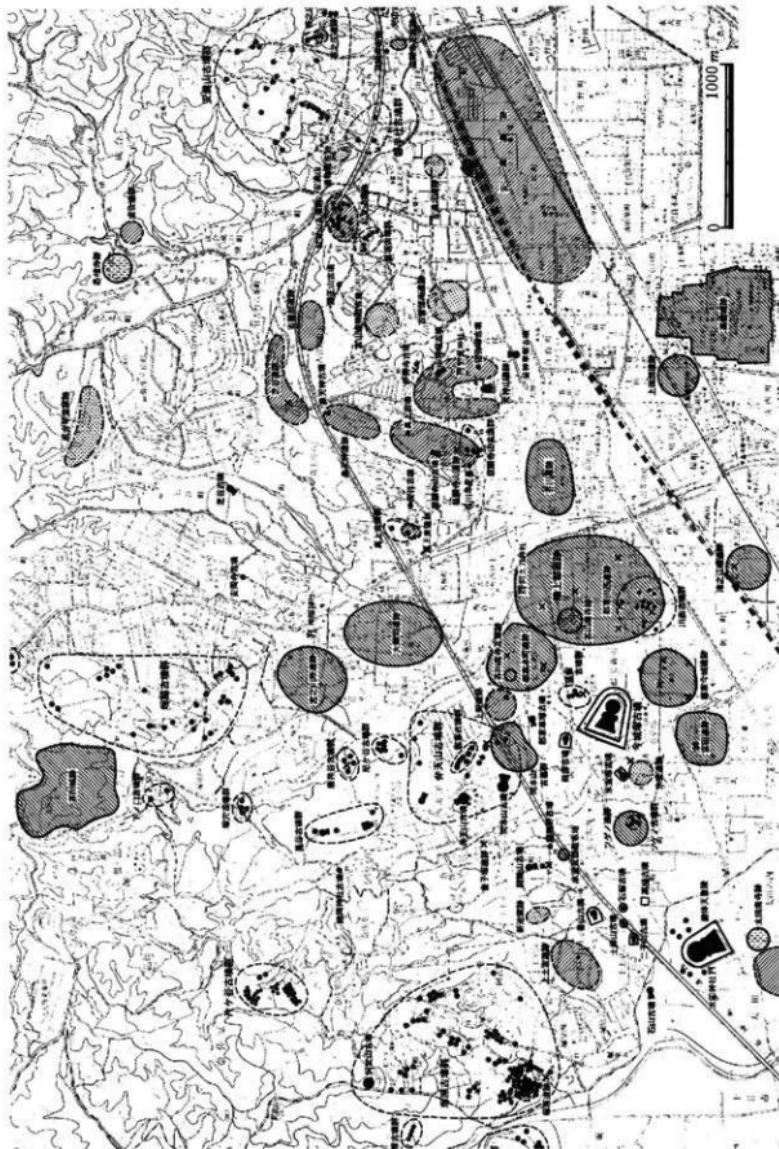
フリガナ 所収遺跡名	天川				
フリガナ 所 在 地	大阪府高槻市須賀町282-5				
コ ー ド	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 05"	135° 38' 21"	19940829 ~ 19940830	24.6 m <sup>2</sup>	個人住宅建設工事
27207 86					
所収遺跡名	種別	時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
天川	集落	中 世			

フリガナ 所収遺跡名	天川				
フリガナ 所 在 地	大阪府高槻市須賀町282-6				
コ ー ド	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 05"	135° 38' 21"	19940829 ~ 19940830	18.0 m <sup>2</sup>	個人住宅建設工事
27207 86					
所収遺跡名	種別	時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
天川	集落	中 世			

フリガナ 所収遺跡名	赤川山城				
フリガナ 所 在 地	大阪府高槻市大字原4030				
コ ー ド	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 52' 40"	135° 35' 28"	19941201 ~ 19941227	90.0 m <sup>2</sup>	雜木林整備工事
27207 50					
所収遺跡名	種別	時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
赤川山城	城跡	中 世	土壤・堀切	土師器皿	

# 図 版





島上郡面跡とその周辺



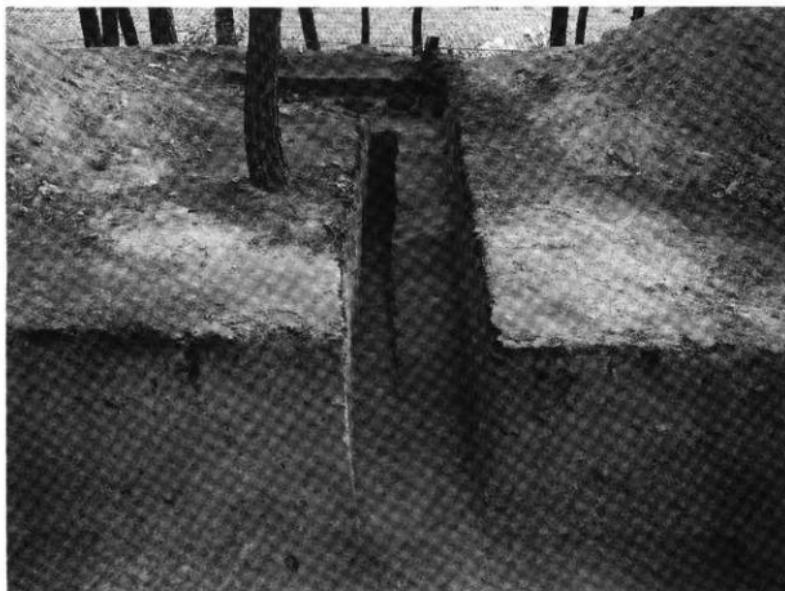
a. 郡家車塚古墳 トレンチ13 第1主体部（北側から）



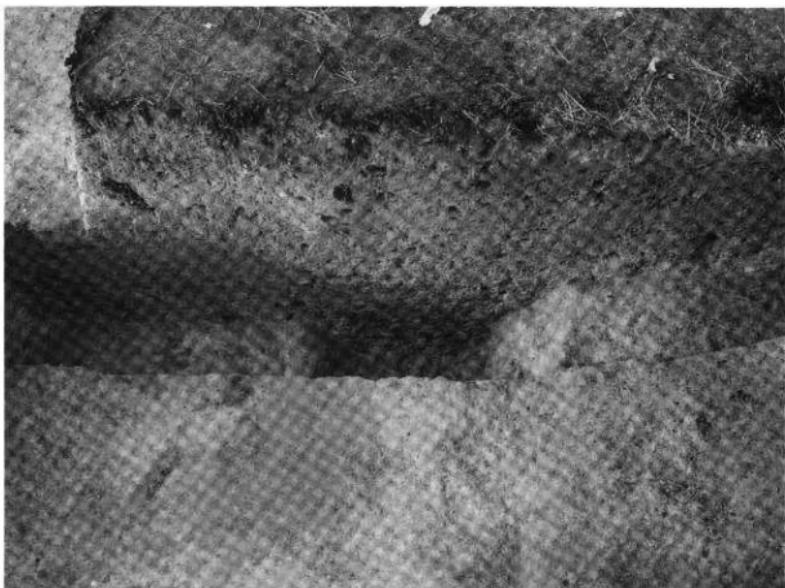
b. 郡家車塚古墳 トレンチ13 第1主体部（西側から）



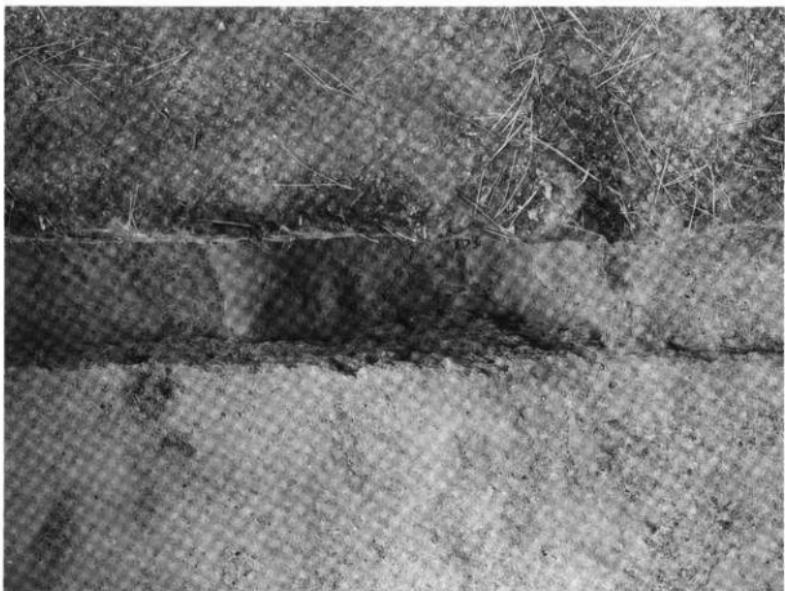
a. 郡家車塚古墳 トレンチ13 北側拡張区（南側から）



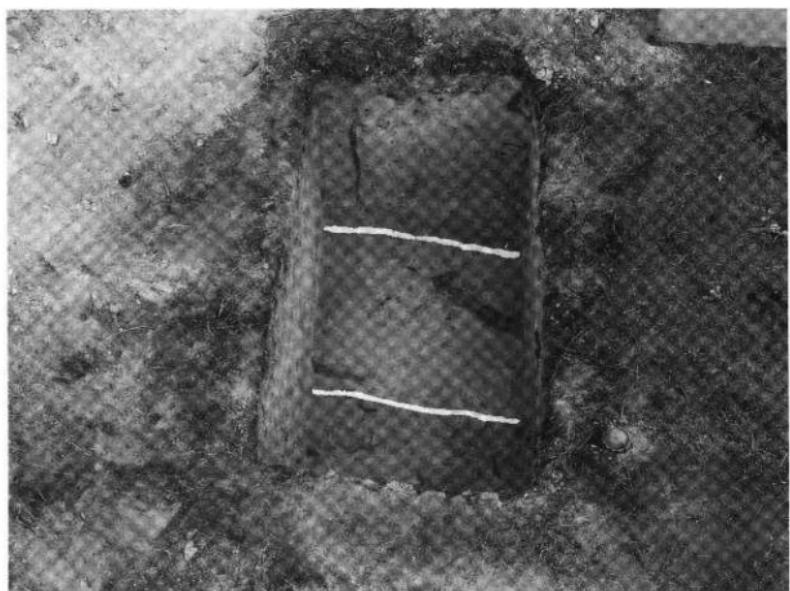
b. 郡家車塚古墳 トレンチ13 南側拡張区（北側から）



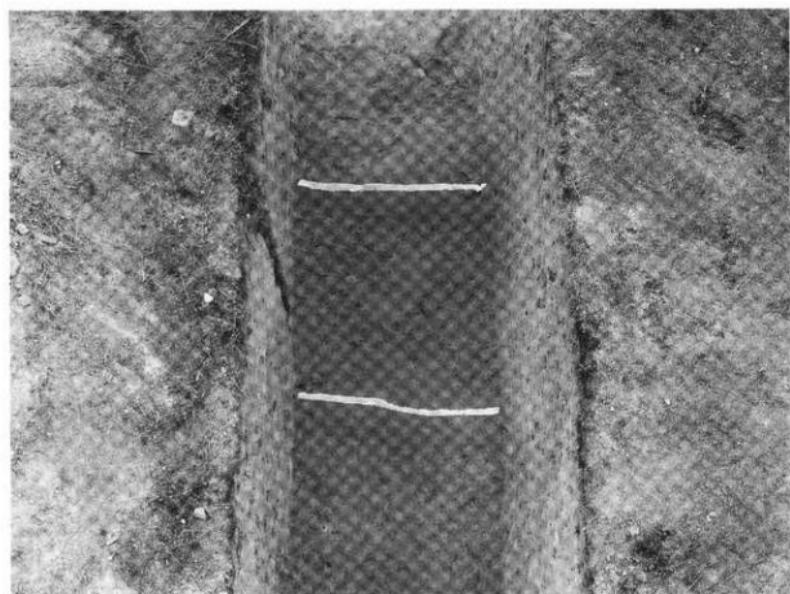
a. 郡家車塚古墳 トレンチ13 第1主体部墓壇北端・被覆粘土検出状況（東側から）



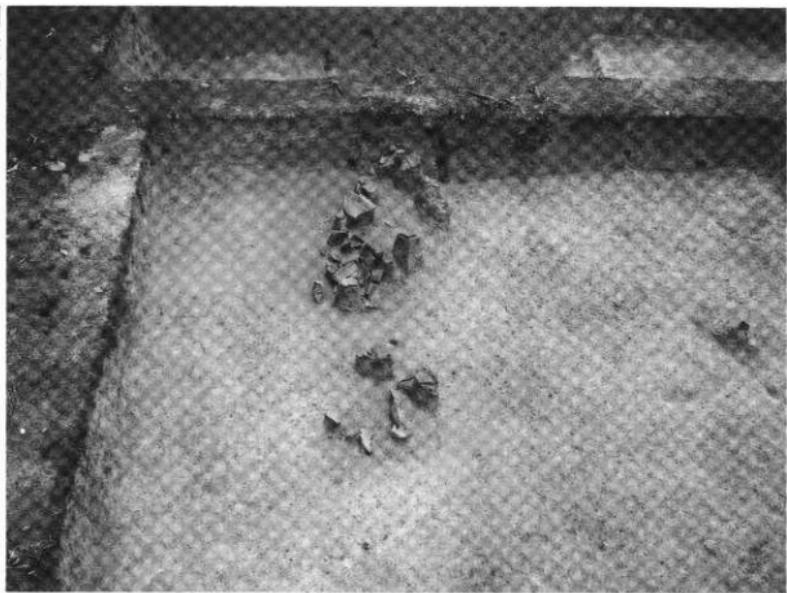
b. 郡家車塚古墳 トレンチ13 第1主体部墓壇北端・被覆粘土検出状況（上から）



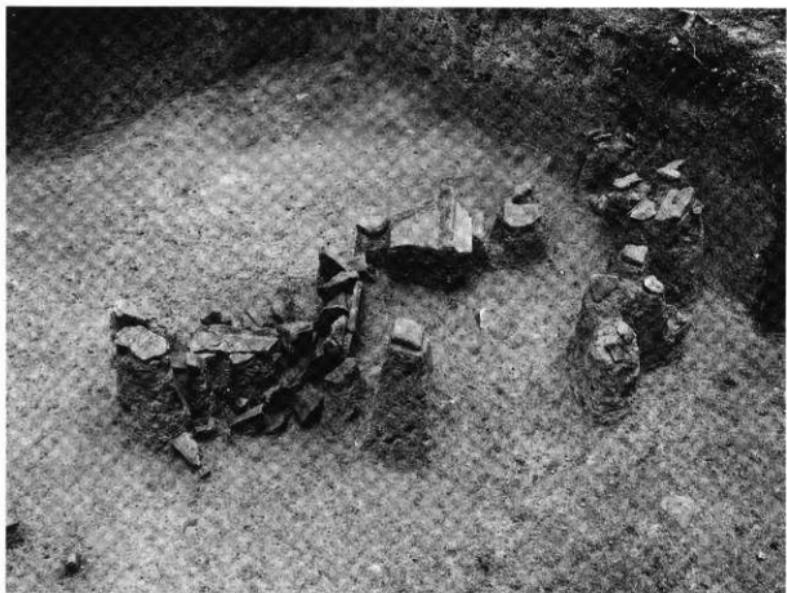
a. 郡家車塚古墳 トレンチ13 第2主体部北側（西側から）



b. 郡家車塚古墳 トレンチ13 第2主体部南側（東側から）



a. 郡家車塚古墳 トレンチ13 家形埴輪出土状況（北側から）



b. 郡家車塚古墳 トレンチ13 家形埴輪出土状況（北西から）



都家車塚古墳 トレンチ14全景（東側から）